

SPARC S7-2 サーバー設置ガイド

Pre-GA

ORACLE®

Part No: E76986-01
2016年6月

Pre-GA

ドラフト 2017-05-11-09:00:41-07:00

Part No: E76986-01

Copyright © 2016, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクルまでご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアまたはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアまたはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアまたはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアまたはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、Oracle Corporationおよびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはオラクル およびその関連会社の登録商標です。その他の社名、商品名等は各社の商標または登録商標である場合があります。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。適用されるお客様とOracle Corporationとの間の契約に別段の定めがある場合を除いて、Oracle Corporationおよびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。適用されるお客様とOracle Corporationとの間の契約に定めがある場合を除いて、Oracle Corporationおよびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクルのアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility ProgramのWeb サイト(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc>)を参照してください。

Oracle Supportへのアクセス

サポートをご契約のお客様には、My Oracle Supportを通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info>)か、聴覚に障害のあるお客様は (<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs>)を参照してください。

目次

このドキュメントの使用方法	7
サーバーの概要	9
概念の概要	9
Oracle ソフトウェアインシリコン機能	9
設置タスクの概要	10
サーバーの概要	11
フロントパネルのコンポーネント (設置)	12
背面パネルのコンポーネント (設置)	13
仕様の確認	15
物理仕様	15
電氣的仕様	16
環境仕様	17
通気に関する注意事項	18
設置の準備	19
出荷用キット	19
取り扱い上の注意事項	20
ESD に関する注意事項	21
設置に必要な工具	22
サーバーの設置	23
オプションのコンポーネント	24
ラックの互換性	24
ラックに関する注意事項	25
ラックマウントキットの内容	26
▼ ラックを固定する	27
▼ サーバーに固定部品を取り付ける	28

▼ ラックの取り付け位置を決める	29
▼ AC 電源ケーブルとスライドレールを取り付ける	31
▼ 工具不要スライドレール構成部品を取り付ける	32
▼ スライドレール構成部品にサーバーを取り付ける	35
▼ ケーブル管理アームを取り付ける	37
サーバーの配線	47
背面のケーブル接続およびポート	47
SER MGT ポートピン配列	49
RJ-45 クロスのピン配列	49
▼ サーバークーブルを接続する	51
はじめてサーバーに電源投入する	53
▼ はじめてサーバーに電源を投入する	53
Oracle ILOM システムコンソール	55
OS のインストール	56
▼ プリインストールされた Oracle Solaris OS を構成する	56
▼ 新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM CLI)	57
▼ 新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM Web インタ フェース)	59
静的 IP アドレスの SP への割り当て	61
▼ SP にログインする (SER MGT ポート)	62
▼ 静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる	63
索引	67

このドキュメントの使用方法

- **概要** – SPARC S7-2 サーバーの設置方法を説明します
- **対象読者** – 技術者、システム管理者、および認定サービスプロバイダ
- **前提知識** – Oracle Solaris オペレーティングシステム、トラブルシューティング、およびハードウェアの交換に関する経験

製品ドキュメントライブラリ

この製品および関連製品のドキュメントとリソースは <http://www.oracle.com/goto/S7-2/docs> で入手できます。

フィードバック

このドキュメントに関するフィードバックを <http://www.oracle.com/goto/docfeedback> からお寄せください。

Pre-GA

サーバーの概要

これらのトピックでは、設置タスクのリストを示し、サーバーの概要を提供し、重要なコンポーネントについて説明します。

- [9 ページの「概念の概要」](#)
- [10 ページの「設置タスクの概要」](#)
- [11 ページの「サーバーの概要」](#)
- [12 ページの「フロントパネルのコンポーネント \(設置\)」](#)
- [13 ページの「背面パネルのコンポーネント \(設置\)」](#)

関連情報

- [23 ページの「サーバーの設置」](#)
- [47 ページの「サーバーの配線」](#)
- [53 ページの「はじめてサーバーに電源投入する」](#)

概念の概要

SPARC S7-2 サーバーでは、きわめて低コストのフォームファクタで、エンタープライズクラスのパフォーマンスおよびソフトウェアインシリコン機能が提供されます。新たに設計されたマイクロプロセッサおよびハードウェアにより、高度なシステム統合、優れたスループット、短いメモリー待機時間、および高帯域幅の IO インターコネクタが提供されます。これらのサーバーは、水平スケールのデータベース、ミドルウェア、およびクラウドコンピューティングワークロードに対して、妥協のない価格とパフォーマンスを提供します。

Oracle ソフトウェアインシリコン機能

SPARC S7 シリーズサーバーのマイクロプロセッサは、アプリケーションを最高レベルのセキュリティ、信頼性、および速度で実行できるようにする、協調設計された

ハードウェアおよびソフトウェア機能を提供します。この機能は Oracle ソフトウェア インシリコンと呼ばれています。これらの機能にはシリコンセキュアメモリーが含まれます。これらの API を使用して、たとえばメモリー破損の問題を検出できるため、アプリケーションが独自のカスタムメモリーアロケータを使用している場合に、アプリケーションデータ整合性 (ADI) を向上させることができます。この機能を有効にした場合、アプリケーションがアクセス権のないメモリーにアクセスしようとすると、多くの場合はエラーが発生します。詳細は、[adi\(3C\)](#)、[adi\(2\)](#)、[memcntl\(2\)](#)、[mmap\(2\)](#)、および[signifo\(3HEAD\)](#) のマニュアルページを参照してください。

Data Analytics Accelerator (DAX) – コプロセッサはハードウェアを介してクエリー関連操作を直接実行し、これによって Oracle Database のパフォーマンスが向上します。Oracle Database 12c インメモリーデータベース操作に DAX ハードウェアアクセラレーションを使用できます。Oracle ソフトウェアインシリコン機能に関する詳細は、<https://www.oracle.com/servers/sparc/software-in-silicon.html> を参照してください。ADI の詳細については、Oracle Solaris 11.3 のドキュメントを参照してください。DAX を使用するには、Oracle Database 12c インメモリー機能を構成する必要があります。手順については、次の場所にある「インメモリー列ストアの使用方法」を参照してください。<http://docs.oracle.com/database/121/ADMIN/memory.htm#ADMIN14257>

関連情報

- 11 ページの「サーバーの概要」

設置タスクの概要

手順	説明	リンク
1.	サーバーの最新情報については、『SPARC S7-2 サーバー プロダクトノート』を参照してください。	『SPARC S7-2 サーバープロダクトノート』
2.	サーバーの機能、仕様、および要件を確認します。	11 ページの「サーバーの概要」 15 ページの「仕様の確認」
3.	注文したすべてのアイテムを受け取ったことを確認します。	19 ページの「出荷用キット」
4.	設置に必要なサーバーの機能、コントロール、LED について学びます。	12 ページの「フロントパネルのコンポーネント (設置)」 13 ページの「背面パネルのコンポーネント (設置)」
5.	安全対策と ESD 対策を採り、必要な工具を集めます。	20 ページの「取り扱い上の注意事項」 21 ページの「ESD に関する注意事項」 22 ページの「設置に必要な工具」

手順	説明	リンク
6.	オプションのコンポーネントがあれば、それらをサーバーに取り付けます。	24 ページの「オプションのコンポーネント」
7.	サーバーをラックに設置します。	23 ページの「サーバーの設置」
8.	データケーブルと管理ケーブルをサーバーに接続します。	47 ページの「サーバーの配線」
9.	電源コードをサーバーに接続し、SP 上の Oracle ILOM を構成し、サーバーにはじめて電源を入れ、オペレーティングシステムを設定します。	53 ページの「はじめてサーバーに電源投入する」

関連情報

- 『SPARC S7-2 サーバープロダクトノート』
- SPARC S7-2 サーバーの安全およびコンプライアンスに関するガイド
- 『サーバー管理』
- サーバーサービス

サーバーの概要

このトピックでは、サーバーの主要なコンポーネントおよび機能の概要を説明します。

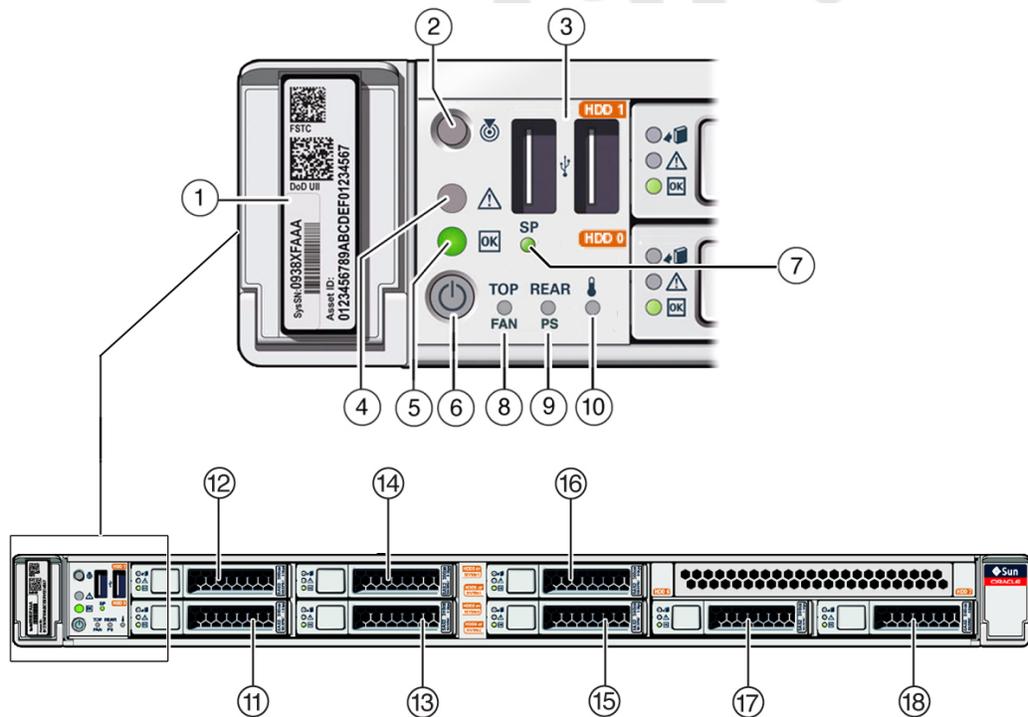
コンポーネント	説明
シャーシ	ラックマウント可能なサーバー。
CPU	マザーボード構成部品への搭載は、1 つまたは 2 つの 8 コア、4.267GHz、130W プロセッサがサポートされています。
メモリー	16 個の DDR4 DIMM スロットがサポートされています。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 各プロセッサモジュールは、4 個または 8 個の DIMM をサポートし、2 つのプロセッサシステムで合計 8 個または 16 個の DIMM となります。 ■ メモリーのタイプまたはサイズの混在はサポートされていません。
I/O 拡張	3 つの薄型 x8 PCIe Gen3 スロット。すべてのスロットが x8 PCIe カードをサポートしており、2 つのスロットで x16 PCIe カードをサポートします。
ストレージデバイス	内蔵ストレージの場合、サーバーは次を提供します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ フロントパネルから取り扱うことができる 8 個の 2.5 インチドライブベイ、4 スロット NVMe が可能な SFF SAS/SATA ドライブをサポート。 ■ 内部 SAS HBA カード。 ■ 非 RAID LSI SAS3008 HBA のサポート。
USB ポート	外部 USB 2.0 ポート x 2 (フロントパネル)。

コンポーネント	説明
Ethernet ポート	10GbE 100/1000/10000M ビット/秒、RJ-45 ベースのポート x 4 (背面パネル)。
電源装置	ホットスワップ可能な A266 1.2kW x 2 (N+1)。
冷却ファン	シャーシ前面にあるホットスワップ可能な冗長ファン x 4 (トップローディング)。
SP	マザーボード上の Oracle Integrated Lights Out Manager (Oracle ILOM)。

関連情報

- サーバーサービス
- Oracle ILOM のドキュメント
- [12 ページの「フロントパネルのコンポーネント \(設置\)」](#)
- [13 ページの「背面パネルのコンポーネント \(設置\)」](#)

フロントパネルのコンポーネント (設置)



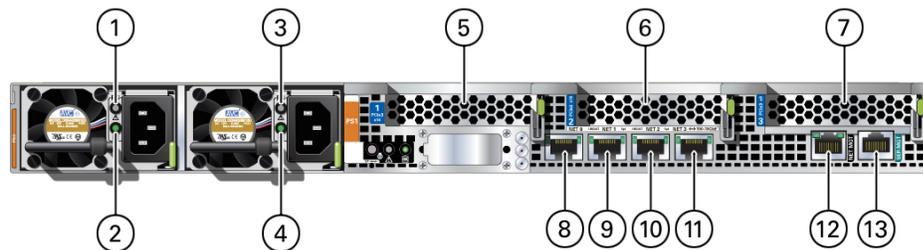
番号	説明	番号	説明
1	シリアル番号	10	サーバー温度超過 LED (オレンジ色)
2	ロケータ LED (白)	11	ドライブ 0 (HDD/SDD)
3	2つの USB 2.0 コネクタ	12	ドライブ 1 (HDD/SDD)
4	保守アクション要求 LED (オレンジ色)	13	ドライブ 2 (HDD/SDD) または NVMe 0
5	電源/OK LED (緑色)	14	ドライブ 3 (HDD/SDD) または NVMe 1
6	電源ボタン	15	ドライブ 4 (HDD/SDD) または NVMe 2
7	SP OK/障害 LED (緑色またはオレンジ色)	16	ドライブ 5 (HDD/SDD) または NVMe 3
8	ファン保守アクション要求 LED (オレンジ色)	17	ドライブ 6 (HDD/SDD)
9	PS 保守アクション要求 LED (オレンジ色)	18	ドライブ 7 (HDD/SDD)

関連情報

- [11 ページの「サーバーの概要」](#)
- [13 ページの「背面パネルのコンポーネント \(設置\)」](#)

背面パネルのコンポーネント (設置)

注記 - サーバーへのケーブルの接続は、適切な順序で実施する必要があります。電源コードは、データケーブルをすべて接続するまでは接続しないでください。



番号	説明	番号	説明
1	電源装置 0 障害 LED	8	NET 0 100/1000/10000 ポート
2	電源装置 0 OK LED	9	NET 1 100/1000/10000 ポート
3	電源装置 1 障害 LED	10	NET 2 100/1000/10000 ポート
4	電源装置 1 OK LED	11	NET 3 100/1000/10000 ポート
5	PCIe カードスロット 1	12	NET MGT ポート
6	PCIe カードスロット 2	13	SER MGT/RJ-45 シリアルポート
7	PCIe カードスロット 3		

関連情報

- [12 ページの「フロントパネルのコンポーネント \(設置\)」](#)
- [47 ページの「背面のケーブル接続およびポート」](#)
- [51 ページの「サーバーケーブルを接続する」](#)
- [37 ページの「ケーブル管理アームを取り付ける」](#)

Pre-GA

仕様の確認

次のトピックでは、サーバーの設置に必要な技術情報と通気に関する注意事項について説明します。

- [15 ページの「物理仕様」](#)
- [16 ページの「電氣的仕様」](#)
- [17 ページの「環境仕様」](#)
- [18 ページの「通気に関する注意事項」](#)

関連情報

- [11 ページの「サーバーの概要」](#)
- [19 ページの「出荷用キット」](#)

物理仕様

説明	米国	メートル法
高さ	1.68 インチ	4.26 cm
幅	17.185 インチ	43.65 cm
奥行き	29 インチ	73.7 cm
重量 (ラックマウントキットを除く)	43 ポンド	19.5 kg
保守用最小クリアランス (前面)	36 インチ	91.44 cm
保守用最小クリアランス (背面)	36 インチ	91.44 cm
通気用最小クリアランス (前面)	2 インチ	5.08 cm
通気用最小クリアランス (背面)	3 インチ	7.62 cm

関連情報

- [11 ページの「サーバーの概要」](#)
- [20 ページの「取り扱い上の注意事項」](#)

- 23 ページの「サーバーの設置」
- 16 ページの「電氣的仕様」
- 17 ページの「環境仕様」
- 18 ページの「通気に関する注意事項」

電氣的仕様

説明	値
動作入力範囲	100 - 120 VAC、200 - 240 VAC、50-60 Hz
100 VAC 時のコードあたりの最大動作入力電流	8.6 A
200 VAC 時のコードあたりの最大動作入力電流	4.1 A
100 VAC 時の最大動作入力電力	851 W
200 VAC 時の最大動作入力電力	819 W
最大放熱量	2904 BTU/時 3064 KJ/時
最大待機電力	23.4 W
公称温度および電圧条件下での最大サーバー構成仕様 (SPARC S7-2、4.267GHz S7 プロセッサ x 2、64G バイト DDR4 DIMM x 16、SAS x 4 + NVMe-SFF ドライブ x 4、内蔵 HBA カード x 1、PCIe カード x 3)	
アイドル時の AC 入力電力	412 W
MGRID を実行するピーク AC 入力電力	749 W
公称温度および電圧条件下での最小サーバー構成仕様: (SPARC S7-2-1S、4.267GHz S7 プロセッサ x 1、16G バイト DDR4 DIMM x 4、ドライブ x 0、内蔵 HBA カード x 1、PCIe カード x 0)	
アイドル時の AC 入力電力	190 W
MGRID を実行するピーク AC 入力電力	352 W

電力仕様については、次の場所にある電力計算機能を使用してください。

<http://www.oracle.com/us/products/servers-storage/sun-power-calculators>

関連情報

- 53 ページの「はじめてサーバーに電源投入する」

- 15 ページの「物理仕様」
- 17 ページの「環境仕様」
- 18 ページの「通気に関する注意事項」

環境仕様

表 1 温度、湿度、騒音、および高度の仕様

仕様	動作時	非動作時
周囲温度	<ul style="list-style-type: none"> ■ 最大範囲: 最大 2,953 フィート (900 メートル) まで 41°F - 95°F (5°C - 35°C) ■ 最適温度: 21°C - 23°C (69.8°F - 73.4°F) <p>注記 - 900 メートルを超える場合 (最大高度 3,000 メートル) の動作時の最大周囲温度は、300 メートル上がるごとに 1°C 下がります。</p>	-40°C - 68°C (-40°F - 154°F)
相対湿度	<ul style="list-style-type: none"> ■ 10 - 90% 結露なし、短期間最高温度: -5°C - 55°C (23°F - 113°F) ■ 5 - 90% 結露なし、ただし乾燥空気 1kg 当たりの水 0.024kg 以下 (乾燥空気 2.205 ポンド当たり 0.053 ポンドの水) 	最大 93% 結露なし、最大湿球温度 35°C (95°F)
高度	<p>最大 9,840 フィート (3,000 メートル)</p> <p>注記 - 中国市場では、規制により設置が最大高度 6,562 フィート (2,000 メートル) に制限されることがあります。</p>	最大 39,370 フィート (12,000 メートル)
騒音	<ul style="list-style-type: none"> ■ 最大状態: 7.1 ベル A 特性 ■ アイドル状態: 7.0 ベル A 特性 	該当なし

表 2 衝撃および振動の仕様

説明	動作時	非動作時
衝撃	3.5 G、11 ms 半正弦	<p>ロールオフ: 前面から背面方向への 1.25 インチ ロールオフ自由落下</p> <p>しきい値: 13 mm の段差、衝突時の速度 0.65 m/s</p>
振動	<p>0.15 G (z 軸)、</p> <p>0.10 G (x 軸、y 軸)、5 - 500 Hz 掃引正弦</p>	<p>0.5 G (z 軸)、</p> <p>0.25 G (x 軸、y 軸)、5 - 500 Hz 掃引正弦</p>

関連情報

- SPARC S7-2 サーバーの安全およびコンプライアンスに関するガイド
- 15 ページの「物理仕様」

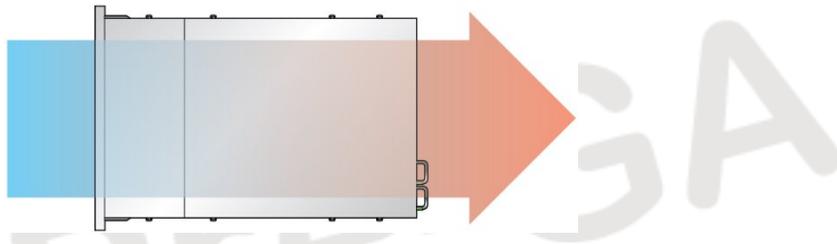
- 16 ページの「電氣的仕様」
- 17 ページの「環境仕様」
- 18 ページの「通気に関する注意事項」

通気に関する注意事項



注意 - サーバーの内部温度を安全な動作範囲内に保つためには、適度な通気が不可欠です。

通気はサーバーの前面から背面に流れます。



これらのガイドラインに従って、サーバー内の通気が妨げられないようにします。

- 通気の最小クリアランスの仕様に従います。15 ページの「物理仕様」を参照してください。
- サーバーは前面が涼しい通路、背面が暖かい通路に面するように設置してください。
- 暖気をサーバーに向けないでください。
- ラックまたはキャビネット内で空気が再循環しないようにしてください。
- 内部コンポーネントを保守する際に、エアダクト、エアバッフル、およびフィルターパネルが正しく取り付けられていることを確認します。
- ケーブルが通気を妨げないように配線します。

関連情報

- 25 ページの「ラックに関する注意事項」
- 15 ページの「物理仕様」
- 16 ページの「電氣的仕様」
- 17 ページの「環境仕様」

設置の準備

これらのトピックでは、サーバーの設置に先立って従うべき注意事項、組み立てに必要な工具、および実行するタスクについて詳しく説明します。

手順	説明	リンク
1.	注文したアイテムがすべて届いていることを確認します。	19 ページの「出荷用キット」
2.	安全対策と ESD 防止対策を確認します	20 ページの「取り扱い上の注意事項」 21 ページの「ESD に関する注意事項」
3.	適切な工具があることを確認します。	22 ページの「設置に必要な工具」

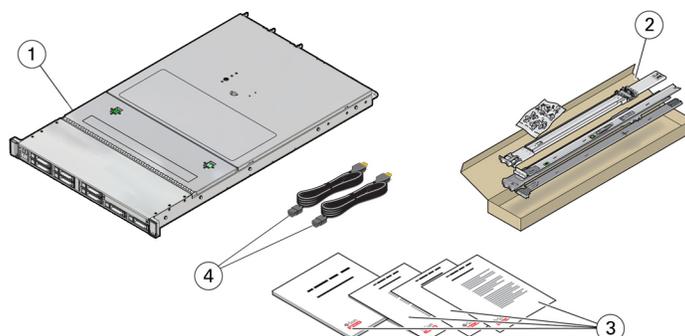
関連情報

- [23 ページの「サーバーの設置」](#)
- [47 ページの「サーバーの配線」](#)
- [53 ページの「はじめてサーバーに電源投入する」](#)

出荷用キット

注記 - サーバーが到着したら、設置する環境にサーバーを置いてください。設置場所で、梱包を解かずにサーバーを 24 時間放置してください。この休止期間によって、温度衝撃および結露を防ぐことができます。

使用するサーバーと一緒に出荷されるコンポーネントがすべて届いていることを確認します。



番号	説明
1	サーバー
2	ラックマウントキット
3	静電気防止用リストストラップ
4	印刷版ドキュメント
5	AC 電源コード 2 本

注記 - 出荷用キットには、工場 PCIe カードを取り付けたときにサーバーから取り外された PCIe スロットフィラーも含まれている場合があります。これらのフィラーを保管し、カードをサーバーから取り外したときに PCIe スロットに挿入するために使用します。

関連情報

- [11 ページの「サーバーの概要」](#)
- [19 ページの「設置の準備」](#)

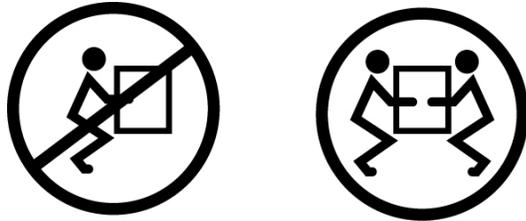
取り扱い上の注意事項



注意 - 取り付け作業を開始する前に、装置ラックの転倒防止バーを配置してください。



注意 - サーバーの重量は約 19.5 kg (43 ポンド) です。このドキュメントの手順に従って、サーバーを持ち上げてラックエンクロージャーに取り付けるには、2人の作業員が必要です。



注意 - 2人で行う手順については、各手順の前後および作業中に常に意思の疎通を図り、混乱が起こらないようにしてください。

関連情報

- [15 ページの「物理仕様」](#)
- [23 ページの「サーバーの設置」](#)
- SPARC S7-2 サーバーのスタートガイド

ESD に関する注意事項

電子機器は、静電気により損傷する可能性があります。サーバーの設置またはサービス時は、接地された静電気防止リストストラップ、フットストラップ、または同様の安全器具を使用して、静電気による損傷を防止します。



注意 - 電子コンポーネントを静電気による損傷から保護するために (システムが永続的に使用できなくなるか、保守技術者による修復が必要になる可能性があります)、静電気防止用マット、静電気防止袋、使い捨て静電気防止用マットなどの静電気防止面にコンポーネントを置いてください。システムコンポーネントを取り扱うときは、シャーシの金属面に接続された静電防止用アースストラップを着用してください。

関連情報

- [20 ページの「取り扱い上の注意事項」](#)

設置に必要な工具

- プラスのねじ回し (Phillips の 2 番)
- ESD マットおよびアースストラップ

さらに、次のいずれかのようなシステムコンソールデバイスも用意する必要があります。

- ASCII 端末
- ワークステーション
- 端末サーバー
- 端末サーバーに接続されたパッチパネル

関連情報

- [20 ページの「取り扱い上の注意事項」](#)
- [21 ページの「ESD に関する注意事項」](#)
- [サーバーサービス](#)

Pre-GA

サーバーの設置

これらのトピックでは、ラックマウントキットのレール構成部品を使用して、サーバーをラック内に設置する方法について説明します。レール構成部品を購入された場合は、これらの手順に従ってください。

注記 - このガイドでは、用語「ラック」とはオープンラックまたはクローズキャビネットを意味します。

手順	説明	リンク
1.	オプションのコンポーネントを取り付けます。	24 ページの「オプションのコンポーネント」
2.	ラックがサーバーの要件を満たしていることを確認します。	24 ページの「ラックの互換性」
3.	ラックを扱う際の注意事項を確認します。	25 ページの「ラックに関する注意事項」
4.	転倒防止メカニズムを使用して、サーバーを取り付けるときにラックが転倒しないようにします。	27 ページの「ラックを固定する」
5.	サーバー取り付け用のスライドレール、固定部品、およびスライドレール構成部品を準備します。	28 ページの「サーバーに固定部品を取り付ける」 29 ページの「ラックの取り付け位置を決める」 31 ページの「AC 電源ケーブルとスライドレールを取り付ける」 32 ページの「工具不要スライドレール構成部品を取り付ける」
6.	ラックにサーバーを取り付けます。	35 ページの「スライドレール構成部品にサーバーを取り付ける」
7.	(オプション) CMA を取り付けます。	37 ページの「ケーブル管理アームを取り付ける」
8.	配線の要件とポートの情報を確認します。データケーブルと管理ケーブルをサーバーに接続します。	47 ページの「サーバーの配線」
9.	はじめてサーバーに電源を投入する準備をします。	53 ページの「はじめてサーバーに電源投入する」

関連情報

- [19 ページの「設置の準備」](#)

- [47 ページの「サーバーの配線」](#)

オプションのコンポーネント

システムの一部として注文された増設メモリーや PCIe カードなどのオプションのコンポーネントは、サーバーの出荷前に工場ですべてのサーバーに取り付けられます。システムと一緒に注文されていないオプションは別に出荷されます。可能な場合は、サーバーをラックに取り付ける前に、これらのコンポーネントを取り付けてください。

ラックマウントキットを除いて、工場ですべてのサーバーに取り付けられないオプションを注文した場合は、取り付け手順について、サーバーのサービスマニュアルおよびコンポーネントのドキュメントを参照してください。

関連情報

- オプションのコンポーネントのドキュメント
- サーバーサービス

ラックの互換性

使用するラックがオプションのスライドレールおよびケーブル管理の構成部品オプションに対応しているかを確認します。オプションのスライドレールは、次の仕様を満たすさまざまな標準ラックに対応しています。

項目	要件
構造	4 ポストラック (前後の両方で固定)。サポートされるラックタイプ: 四角穴 (9.5 mm) および丸穴 (M6 または 1/4-20 ネジのみ)。 2 ポストラックは互換性がありません。
ラック水平方向の開口部とユニットの縦方向のピッチ	ANSI/EIA 310-D-1992 または IEC 60927 規格に準拠していること。
前方と後方の取り付け面の間の距離	61 から 91.5 cm (24 から 36 インチ)。
前方取り付け面の前面のスペースの奥行き	キャビネット前面ドアまでの距離が 2.54 cm (1 インチ) 以上あること。
前方取り付け面の背後のスペースの奥行き	ケーブル管理アームを使用する場合は、キャビネット背面ドアまで 90 cm (35.43 インチ) 以上、ケーブル管理アームを使用しない場合は 80 cm (31.5 インチ) 以上の間隔があること。

項目	要件
前方と後方の取り付け面の間のスペースの幅	構造的支柱とケーブルの溝の距離が 45.6 cm (18 インチ) 以上であること。
保守用最小スペース	<ul style="list-style-type: none">■ スペース、サーバー前面: 123.2 cm (48.5 インチ)■ スペース、サーバー背面: 91.4 cm (36 インチ)

関連情報

- 15 ページの「物理仕様」
- 20 ページの「取り扱い上の注意事項」
- 25 ページの「ラックに関する注意事項」

ラックに関する注意事項



注意 - 装置の搭載: 上方が重くなり転倒することがないように、装置は必ずラックの最下段から上へ順次搭載してください。装置の取り付け中にラックが転倒しないように、ラックの転倒防止バーを伸ばします。



注意 - 動作時周辺温度の上昇: 密閉されたラックアセンブリまたはマルチユニットのラックアセンブリにサーバーを設置している場合、ラック環境の動作時周辺温度が室内の周辺温度より高くなる場合があります。したがって装置は、サーバーに指定された最大周辺温度 (TMA) に適合する環境内のみ設置してください。



注意 - 通気の低下: 装置をラックに取り付けて、装置が安全に動作するための十分な通気を得られるようにします。



注意 - 装置の配置: 重量が均等に分散されるように装置をラックに搭載します。装置の配置が不均等な場合、危険な状態になっている可能性があります。



注意 - 回路の過負荷: 電源装置の回路に過大な電流が流れないようにします。サーバーを電源回路に接続する前に、装置のラベルに示されている電力定格を確認し、回路の過負荷によって過電流保護や装置の配線にどのような影響があるかを検討します。



注意 - 安全なアース: ラックに搭載する装置は必ず安全にアースします。分岐回路への直接接続以外の電源接続 (電源タップの使用など) の場合は、特に注意してください。



注意 - スライドレールに搭載した装置を、シェルフやワークスペースとして使用しないでください。



注意 - サーバーの重量は約 19.5 kg (43 ポンド) です。このドキュメントの手順に従って、サーバーを持ち上げてラックエンクロージャーに取り付けるには、2人の作業員が必要です。



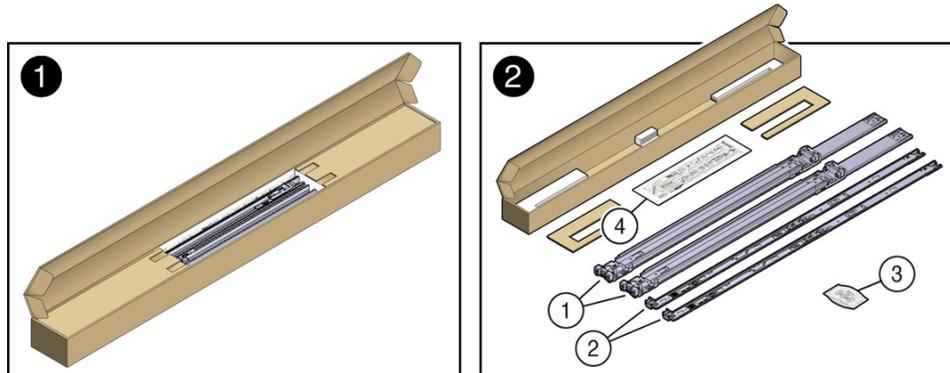
関連情報

- [15 ページの「物理仕様」](#)
- [20 ページの「取り扱い上の注意事項」](#)
- [27 ページの「ラックを固定する」](#)

ラックマウントキットの内容

ラックマウントキットは、2つのスライドレール、2つの固定部品、オプションの取り付けねじで構成されます。

注記 - スライドレールとオプションのケーブル管理アームを使用して、サーバーを4ポストラックに取り付ける手順については、ラックマウントキットの取り付け手順カードを参照してください。



番号	説明
1	スライドレール
2	固定部品
3	4つの M4 x 5 細目固定部品取り付けネジ (オプション)
4	取り付け手順カード

関連情報

- [24 ページの「ラックの互換性」](#)

▼ ラックを固定する



注意 - 作業員が負傷する危険性を低減するために、すべての転倒防止装置を伸ばしてラックを固定してから、サーバーを取り付けます。

次の手順の詳細な説明については、ラックのドキュメントを参照してください。

1. ラックに関する注意事項を読み、ラックを固定します。
[25 ページの「ラックに関する注意事項」](#)を参照してください。
2. ラックの前面ドアと背面ドアを開いて取り外します。
3. 取り付け中にラックキャビネットが転倒しないように、用意されているすべての転倒防止機能を使用してキャビネットを固定します。

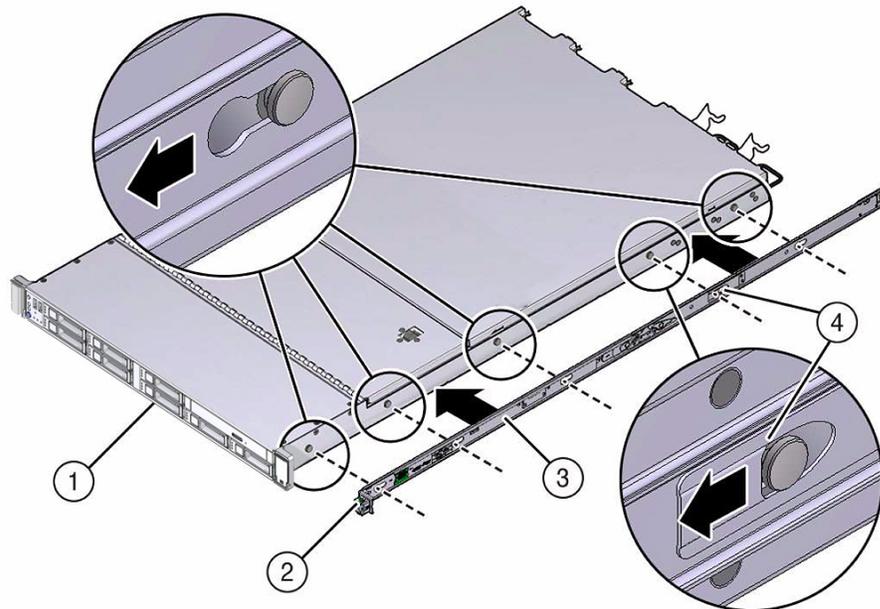
4. 横転を防ぐための平行調整脚がラックの下部にある場合は、調整脚を床まで完全に伸ばします。

関連情報

- ラックのドキュメント
- SPARC S7-2 サーバーの安全およびコンプライアンスに関するガイド
- [24 ページの「ラックの互換性」](#)
- [25 ページの「ラックに関する注意事項」](#)

▼ サーバーに固定部品を取り付ける

1. スライドレールロックがサーバーの前面に来て、固定部品の 5 つの鍵穴の開口部がシャーシの側面にある 5 つの位置決め用ピンとちょうど合うように、シャーシに対して固定部品を位置合わせします。



番号	説明
1	シャーシ前面

番号	説明
2	スライドレールのロック
3	固定部品
4	固定部品クリップ

2. 5つのシャーシ位置決め用ピンの頭を固定部品の5つの鍵穴の開口部に挿入し、固定部品を、クリップがカチッと音がして固定されるまで、シャーシの前面に向けて引っ張ります。
3. 背面の位置決め用ピンが固定部品のクリップにかみ合っていることを確認します。
4. **ステップ1**から**ステップ3**を繰り返して、サーバーの反対側の側面に残りの固定部品を取り付けます。

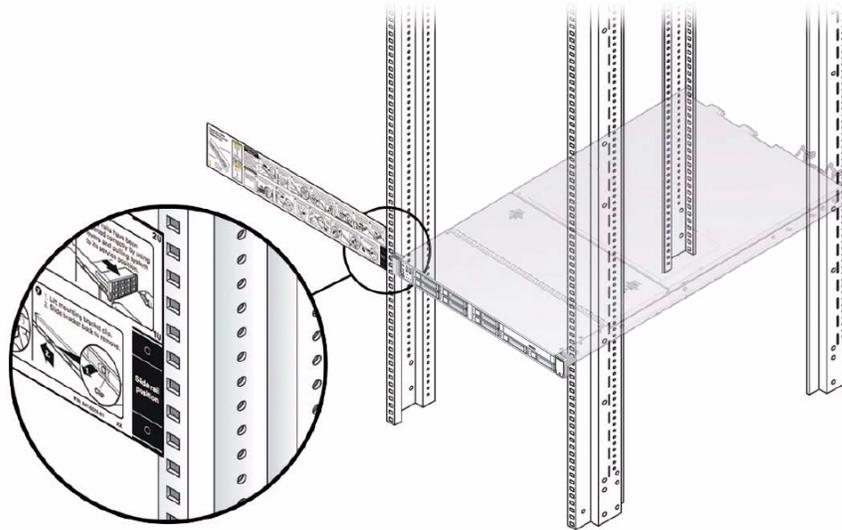
関連情報

- [29 ページの「ラックの取り付け位置を決める」](#)
- [32 ページの「工具不要スライドレール構成部品を取り付ける」](#)

▼ ラックの取り付け位置を決める

1. ラックキャビネットに、サーバーを取り付けるための少なくとも1ラックユニット分の高さがあることを確認します。
2. ラックマウント取り付けカードを前面レールに差し込みます。

カード下端がサーバーの底に当たります。取り付けカードの下端から上向きに測ってください。



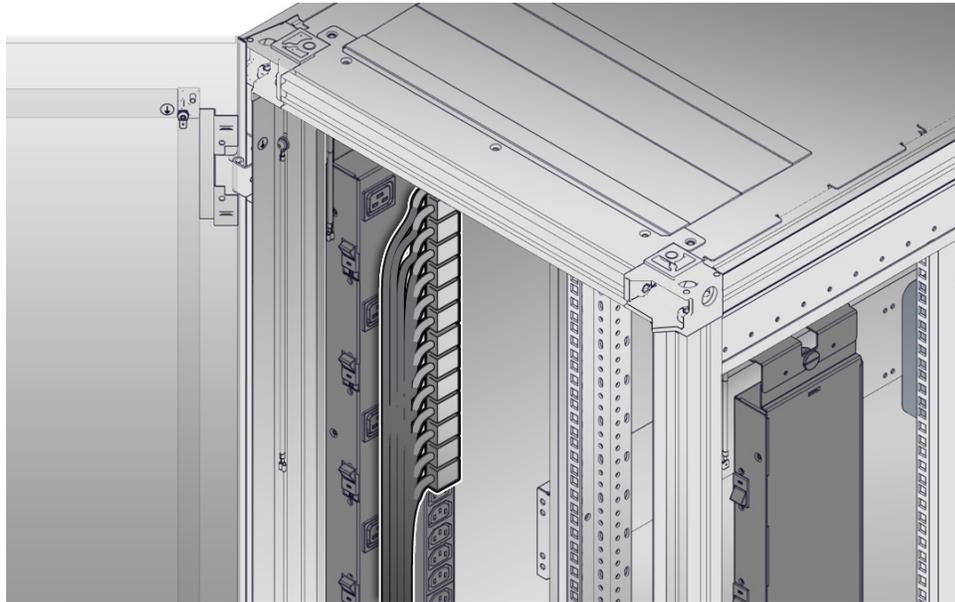
3. 前面のスライドレールの取り付け穴にマークを付けます。
4. 背面のスライドレールの取り付け穴にマークを付けます。

関連情報

- [24 ページの「ラックの互換性」](#)
- [28 ページの「サーバーに固定部品を取り付ける」](#)
- [32 ページの「工具不要スライドレール構成部品を取り付ける」](#)

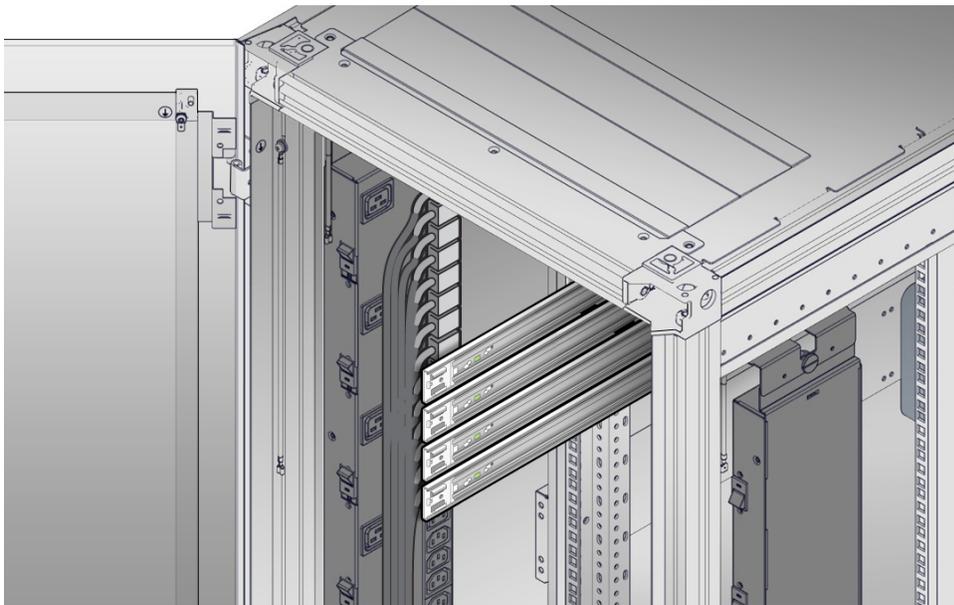
▼ AC 電源ケーブルとスライドレールを取り付ける

1. スライドレールをラックに取り付ける前に、ラックにマウントするサーバー用の左側および右側の PDU 電源ソケットに L 字型 AC 電源ケーブルを取り付けます。



2. スライドレールをラックに取り付けます。

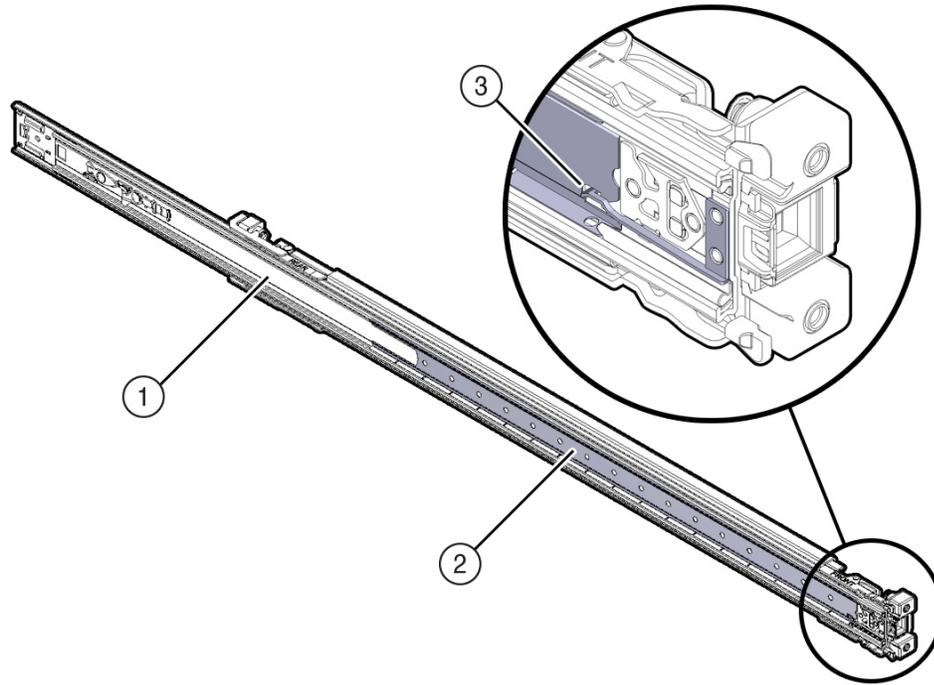
32 ページの「工具不要スライドレール構成部品を取り付ける」を参照してください。



▼ 工具不要スライドレール構成部品を取り付ける

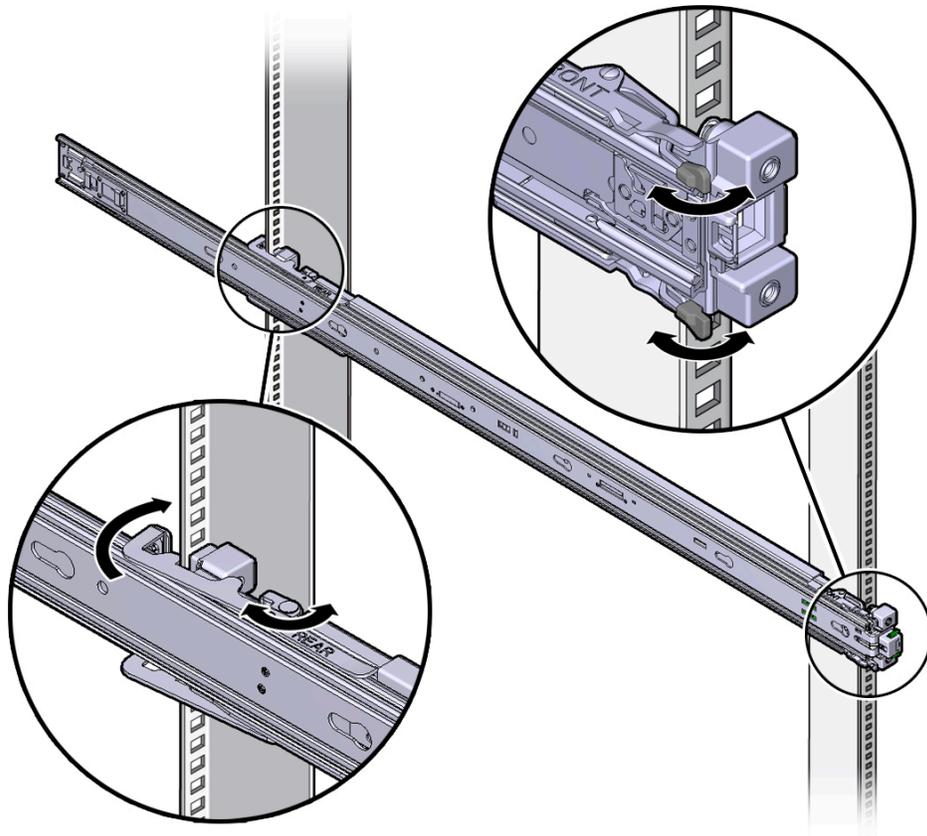
工具不要スライドレール構成部品をラックに取り付けるには、次の手順を使用します。

1. 玉軸受けトラックが前方になり所定の位置にロックされるように、スライドレール構成部品の向きを合わせます。



番号	説明
1	スライドレール
2	玉軸受けトラック
3	ロックメカニズム

2. スライドレール構成部品の背面を背面ラックレールの内側に合わせ、カチッと音がして構成部品が固定されるまで押し込みます (ラックの左右のどちらの側から行なってもかまいません)。



3. スライドレール構成部品の前面を前面ラックレールの外側に合わせ、カチッと音がして構成部品が固定されるまで押し込みます。
4. **ステップ 1** から**ステップ 3** を繰り返して、スライドレール構成部品をラックの反対側にも取り付けます。

関連情報

- 28 ページの「サーバーに固定部品を取り付ける」
- 29 ページの「ラックの取り付け位置を決める」
- 35 ページの「スライドレール構成部品にサーバーを取り付ける」

▼ スライドレール構成部品にサーバーを取り付ける

この手順を使用して、固定部品を取り付けたサーバーシャーシを、ラックに取り付けられているスライドレール構成部品に装着します。

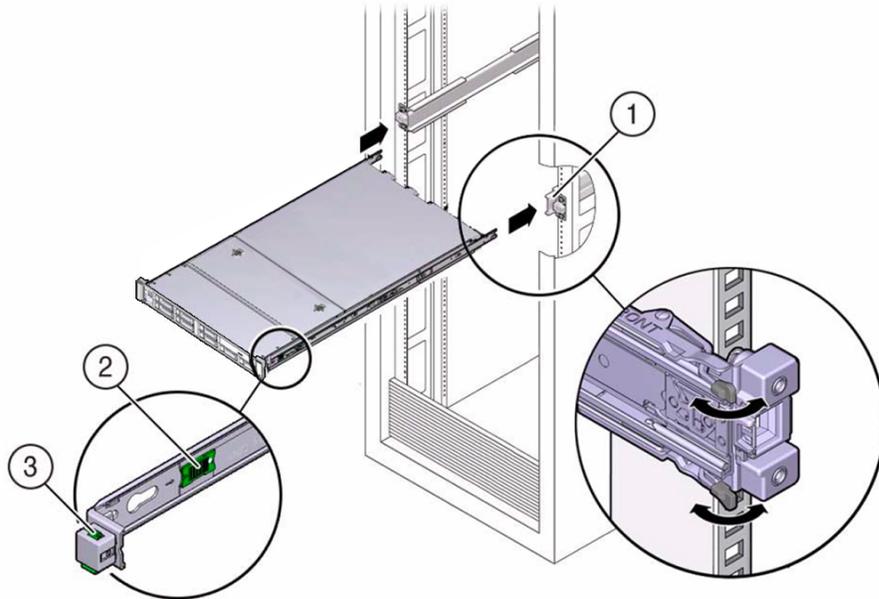


注意 - サーバーは重いので、この手順では少なくとも2名の作業者がが必要です。この手順を1人で実行すると、機器が損傷したり、けがをする可能性があります。



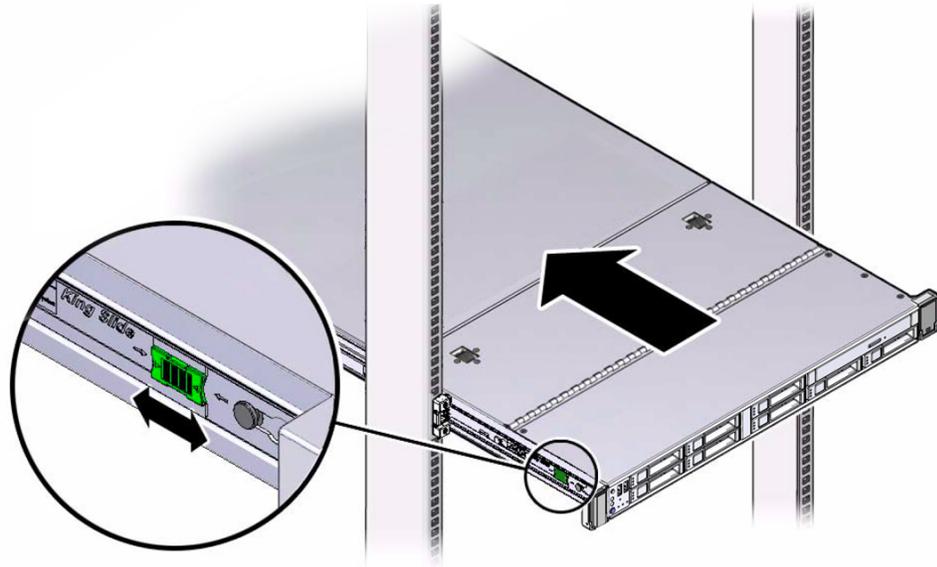
注意 - 上方が重くなり転倒することがないように、装置は必ずラックの最下段から上へ順次搭載してください。装置の取り付け時にラックが転倒しないように、ラックの転倒防止バーを伸ばします。

1. スライドレールをラックのスライドレール構成部品に可能なかぎり奥まで押し込みます。
2. 固定部品の後端が、ラックに取り付けられているスライドレール構成部品と合うようにサーバーを持ち上げます。
3. 固定部品をスライドレールに挿入し、固定部品がスライドレールの止め具に接触するまでサーバーをラック内に押し込みます (約 30 cm (12 インチ))。



番号	説明
1	固定部品をスライドレールに挿入する
2	スライドレールリリースボタン
3	スライドレールのロック

4. 両方の固定部品の緑色のスライドレールリリースボタンを同時に押しながら、サーバーをラック内に押し込みます。固定部品の前面にあるスライドレールのロックがスライドレール構成部品とかみ合うまで、サーバーをラックに押し込みます。かみ合うと、カチッという音がします。



注意 - サーバーがラックに確実に固定されており、スライドレールのロックが固定部品とかみ合っていることを確認してから、オプションのケーブル管理アームを取り付けてください。

関連情報

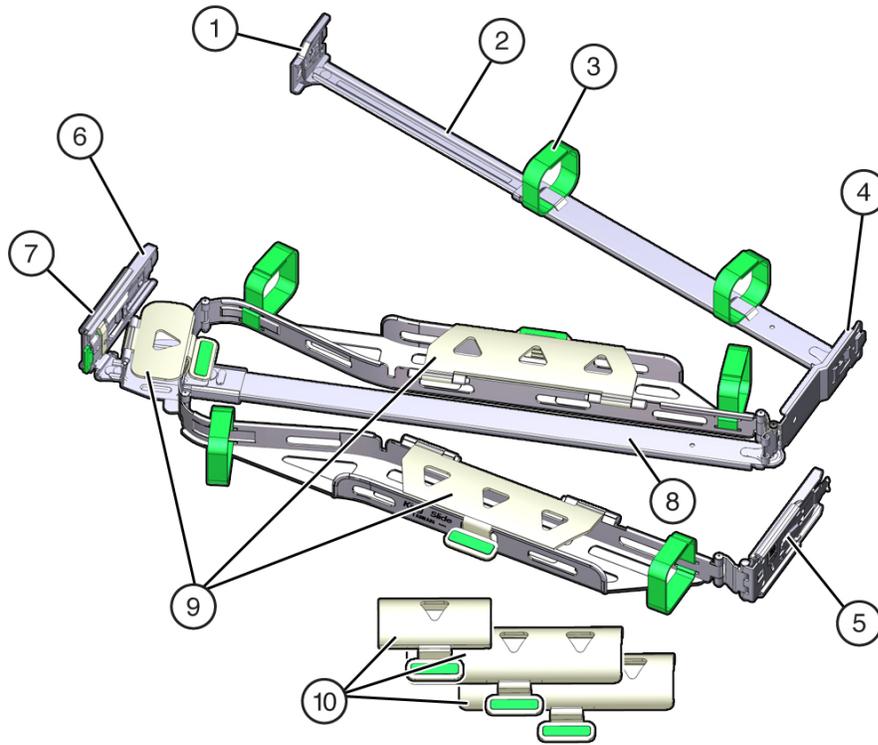
- [37 ページの「ケーブル管理アームを取り付ける」](#)

▼ ケーブル管理アームを取り付ける

この手順に従ってケーブル管理アーム (CMA) を取り付け、これを使用してサーバー背面に接続したケーブルを管理できます。

1. CMA の梱包を解きます。

次の図は CMA コンポーネントを示しています。



番号	説明	番号	説明
1	コネクタ A	6	コネクタ D
2	前部のスライドバー	7	スライドレールのラッチ部品 (コネクタ D で使用)
3	ベルクロストラップ (6)	8	後部のスライドバー
4	コネクタ B	9	SPARC S7-2 ケーブルカバー

番号	説明	番号	説明
5	コネクタ C	10	SPARC S7-2L ケーブルカバー

2. **CMA にサーバーの正しいケーブルカバーが取り付けられていることを確認します。**
SPARC S7-2 はフラットケーブルカバーを使用します。
3. **6 つのベルクロストラップが CMA 内に装着されていることを確認してください。**

注記 - 前部のスライドバーにある 2 つのベルクロストラップが、スライドバーの上部の開口部を通っていることを確認します。これにより、サーバーをラックから引き出したりラックに戻したりするときに、ベルクロストラップがスライドバーの伸縮を妨げなくなります。

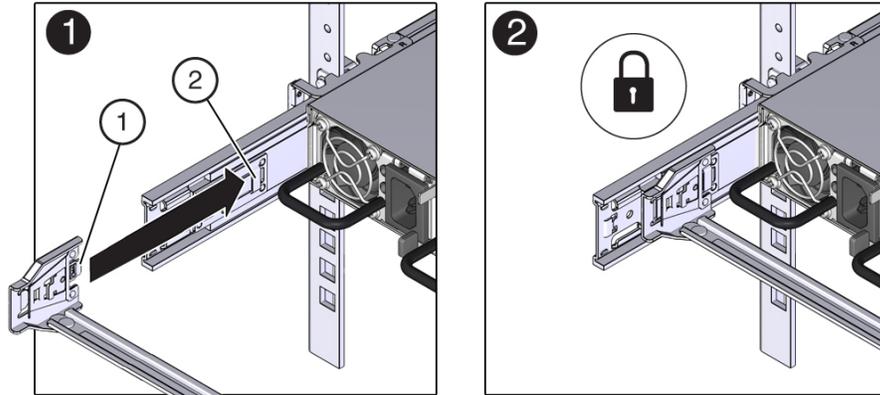
4. **CMA を取り付けやすくするため、サーバーをラックの前面から約 13 cm (5 インチ) 伸ばします。**
5. **CMA を機器ラックの背面に移動し、サーバーの背後に十分な作業スペースがあることを確認します。**

注記 - この手順の「左」と「右」は、装置ラックの背面から見たときの左と右を示します。

注記 - この取り付け手順の全体を通して CMA を支えて、4 つのすべての接着点で固定されるまではそれ自体の重さで垂れ下がることがないようにしてください。

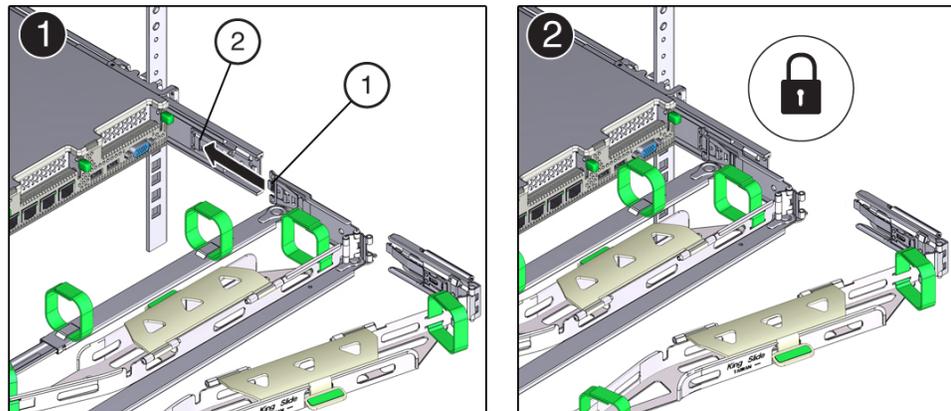
6. **CMA のコネクタ A を左側スライドレールに取り付けます。**
 - a. **CMA のコネクタ A を、カチッと音がして固定されるまで、左側スライドレールの前面スロットに差し込みます (図 1 および 2)。**
コネクタ A の爪 (吹き出し番号 1) がスライドレールの前面スロット (吹き出し番号 2) に入ります。

- b. 前部のスライドバーの左側を静かに力を入れて引っ張り、コネクタ A が適切に固定されていることを確認します。



7. CMA のコネクタ B を右側スライドレールに取り付けます。
- a. CMA のコネクタ B を、カチッと音がして固定されるまで、右側スライドレールの前面スロットに差し込みます (図枠 1 および 2)。
コネクタ B の爪 (吹き出し番号 1) がスライドレールの前面スロット (吹き出し番号 2) に入ります。

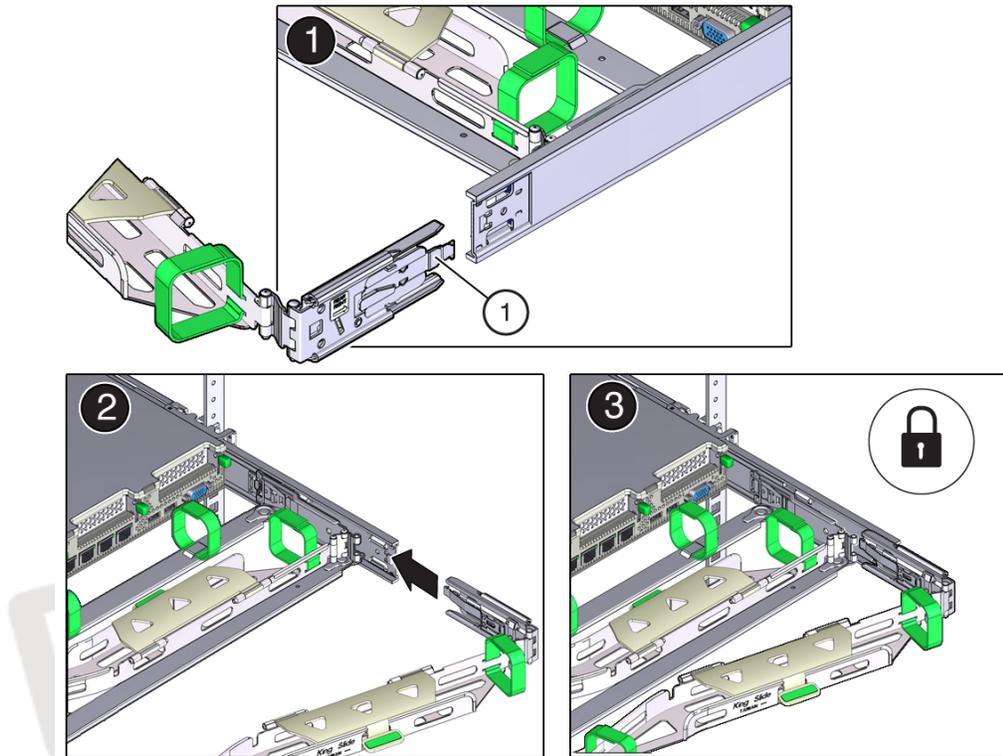
- b. 前部のスライドバーの右側を静かに力を入れて引っ張り、コネクタ B が適切に固定されていることを確認します。



番号	説明
1	コネクタ B の爪
2	右側スライドレールの前面スロット

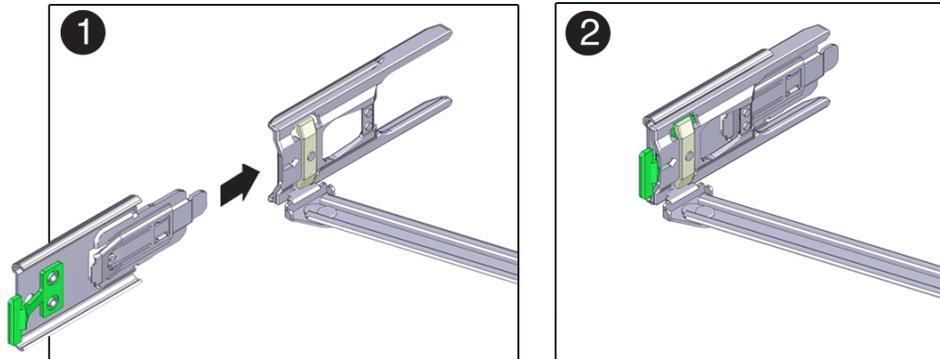
8. CMA のコネクタ C を右側スライドレールに取り付けます。

- a. 固定スプリング (吹き出し番号 1) が右側スライドレールの内側 (サーバー側) になるように、コネクタ C をスライドレールの位置に合わせます (図枠 1)。



- b. コネクタ C を、カチッと音がして固定されるまで、右側スライドレールに差し込みます (図枠 2 および 3)。
- c. CMA の後部のスライドバーの右側を静かに力を入れて引っ張り、コネクタ C が適切に固定されていることを確認します。
9. CMA のコネクタ D を取り付ける準備をするため、スライドレールのラッチ部品をコネクタ D に固定するテープを取り外して、ラッチ部品とコネクタ D の位置が合うことを確認します (図枠 1 および 2)。

注記 - CMA はスライドレールのラッチ部品がコネクタ D にテープで貼られた状態で出荷されます。このコネクタを取り付ける前に、テープを取り外す必要があります。



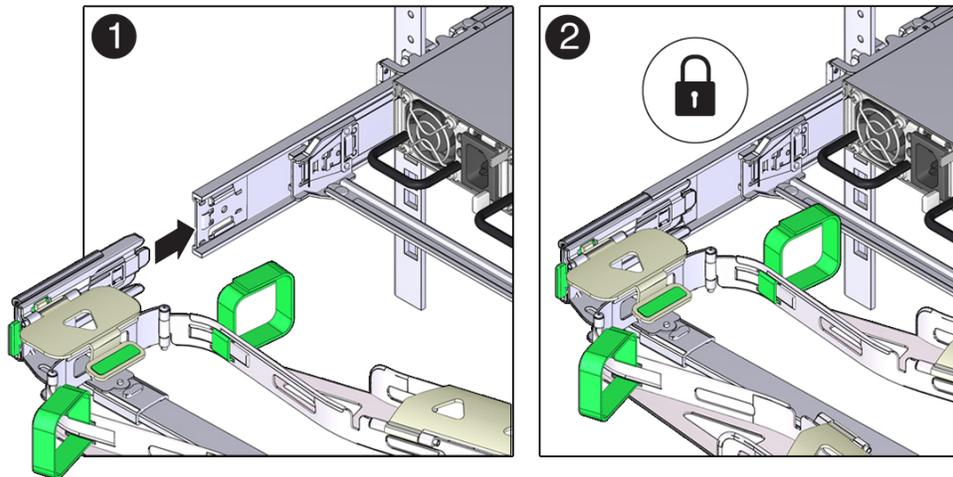
10. CMA のコネクタ D を左側スライドレールに取り付けます。

- a. スライドレールのラッチ部品を適切な位置で支えながら、コネクタ D と対応するスライドレールのラッチ部品を、カチッと音がして固定されるまで、左側スライドレールに差し込みます (図枠 1 および 2)。

注記 - コネクタ D をスライドレールに差し込む際の推奨される簡単な方法は、コネクタ D とラッチ部品を 1 つの構成部品としてスライドレールに取り付けることです。

- b. CMA の後部のスライドバーの左側を静かに力を入れて引っ張り、コネクタ D が適切に固定されていることを確認します。

注記 - スライドレールのラッチ部品には緑色のリリース爪が付いています。このタブを使用してラッチ部品を解除し取り外して、コネクタ D を取り外すことができますようにします。



11. 4つの CMA 接続ポイントを静かに力を入れて引っ張り、CMA コネクタがしっかり固定されていることを確認してから、CMA がそれ自体の重さで垂れ下がるようにします。
12. CMA にケーブルを通す前にスライドレールと CMA が適切に動作することを確認します。
 - a. サーバーを引き出すときにラックが前に傾かないように、ラックのすべての転倒防止装置を伸ばします。

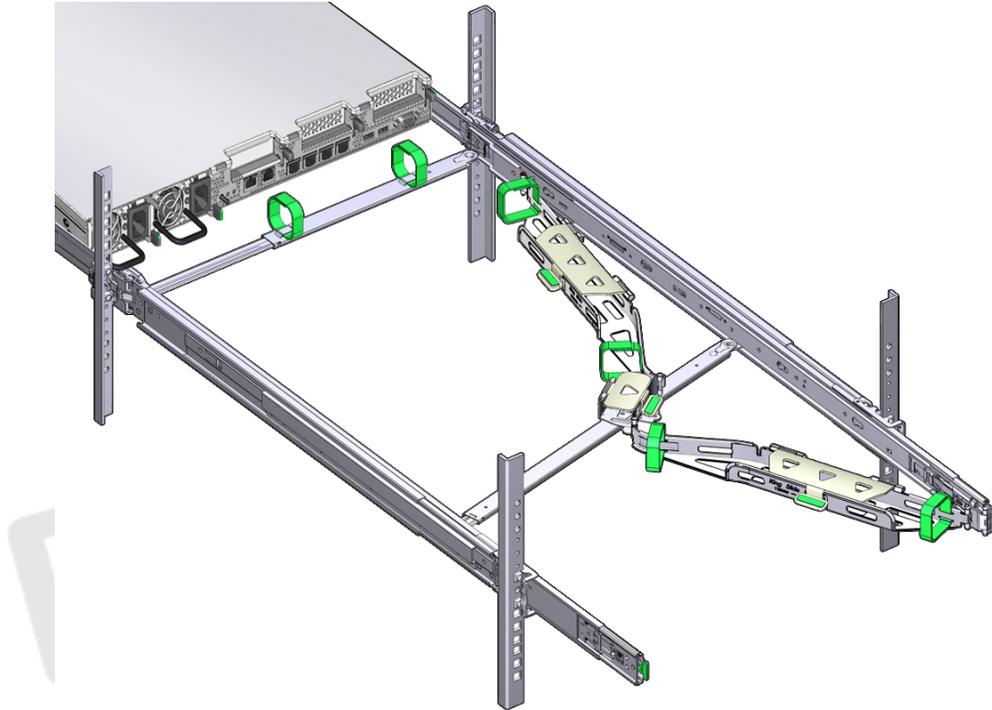


注意 - 作業員が負傷する危険性を低減するため、ラックからサーバーを引き出す前に、拡張ラックキャビネットを固定し、すべての転倒防止装置を伸ばします。

ラックの固定手順については、[27 ページの「ラックを固定する」](#)を参照してください。

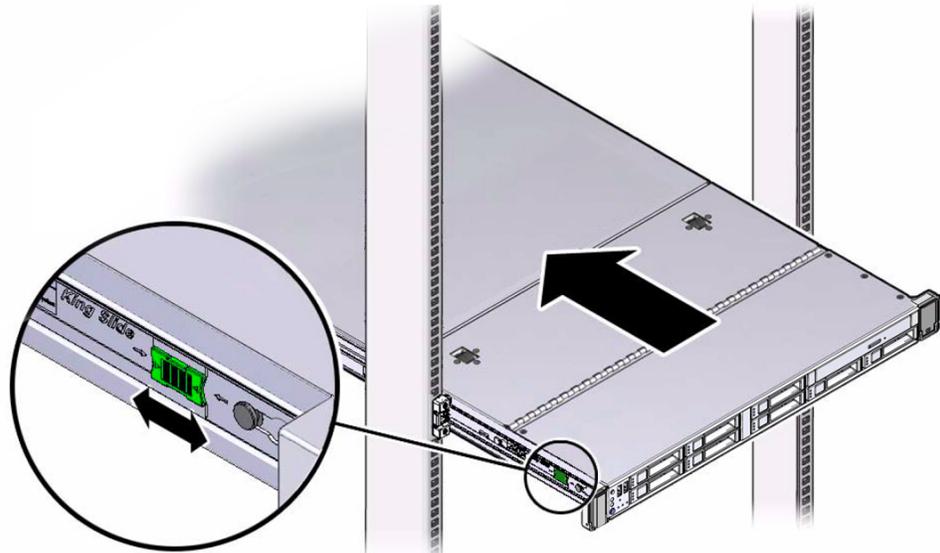
- b. スライドレールがストップに達するまで、ラックからサーバーをゆっくりと引き出します。

- c. 接続されているケーブルが、引っかかったり、ねじれたりしていないか点検します。
- d. CMA がスライドレールでいっぱいまで伸びることを確認します。



13. サーバーをラックに戻します。
- a. 2つの緑色のリリース爪 (サーバーの各側面に1つずつ) をサーバーの前面方向へ同時に引きながら、サーバーをラックに押し込みます。サーバーをラック内に押し込むときに、CMA が固着することなく元に戻ることを確認してください。

注記 - 緑色のリリース爪を引っ張るには、それぞれの爪の端ではなく中央に指を置いて、サーバーの前面に向けて爪を引っ張るように圧力をかけます。

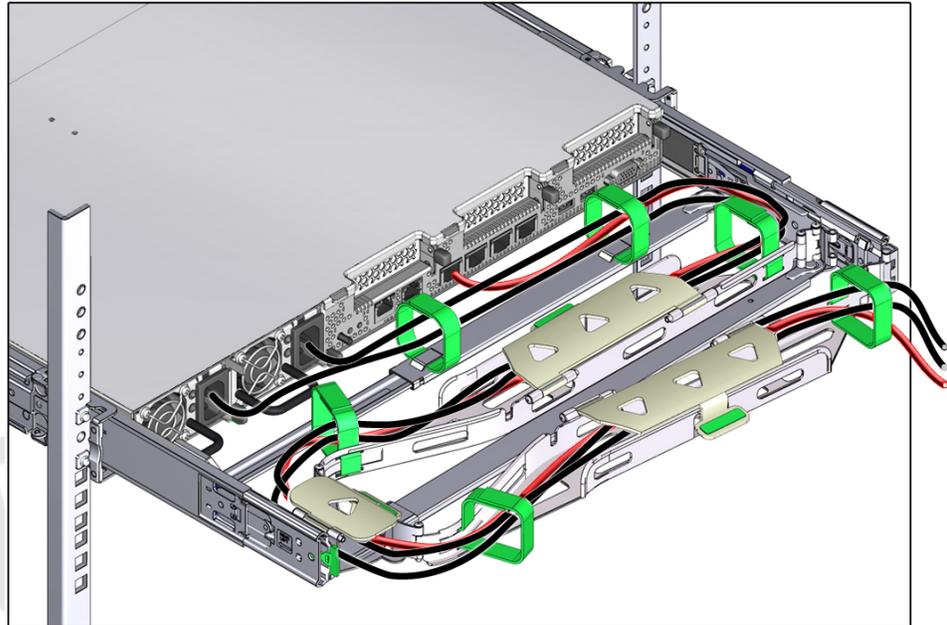


- b. スライドレールのロック (サーバーの前面) がスライドレール構成部品にかみ合うまで、サーバーをラックに押し込みます。
サーバーが通常のラック位置に戻ると、カチッと音がします。

14. 必要に応じて、ケーブルをサーバーに接続します。
サーバーケーブルの接続方法については、[47 ページの「サーバーの配線」](#)を参照してください。
15. **CMA** ケーブルカバーを開いて、**CMA** のケーブル通し口にサーバーケーブルを通し、6つのベルクロストラップでケーブルを固定します。
次の順番で、ケーブル通し口にケーブルを通します。
- a. 最初に最前面のケーブル通し口に通します
 - b. 次に小さいケーブル通し口に通します

c. 次に最背面のケーブル通し口に通します

注記 - 前部のスライドバーにあるベルクロストラップでケーブルを固定するときは、ベルクロストラップがスライドバーの底部に巻き付いていないことを確認してください。そうしないと、ラックからサーバーを引き出したりラックに戻したりするときにスライドバーの伸縮が妨げられる場合があります。



16. 固定されたケーブルが、接続されているサーバーの上部の上や底面の下に伸びていないことを確認します。そうしないと、ラックからサーバーを引き出したりラックに戻したりしたときに、ケーブルがラックに取り付けられたほかの装置の邪魔になる場合があります。

注記 - 必要に応じて、ほかの装置に接近しないように、追加のベルクロストラップを使ってケーブルを束ねてください。追加のベルクロストラップを取り付ける必要がある場合は、CMA コンポーネントではなく、ケーブルだけをストラップで巻いてください。そうしないと、サーバーをラックから引き出したりラックに戻したりするときに CMA スライドバーの伸縮が妨げられる場合があります。

サーバーの配線

次のタスクでは、サーバーのブートを試みる前にネットワークおよびシリアルポートを接続して構成する方法について説明します。

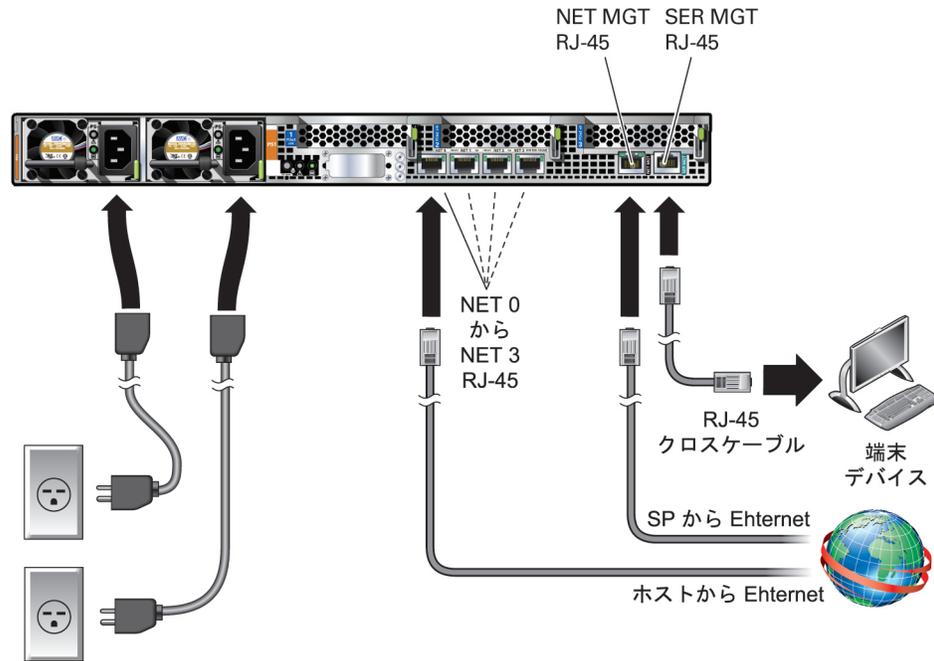
説明	リンク
コネクタポートの場所とケーブル情報を確認します。	47 ページの「背面のケーブル接続およびポート」
この情報を使用して SER MGT ポートへのクロス接続を作成します。	49 ページの「SER MGT ポートピン配列」
データケーブルと電源コードをサーバーに接続します。	51 ページの「サーバーケーブルを接続する」

関連情報

- [23 ページの「サーバーの設置」](#)
- [53 ページの「はじめてサーバーに電源投入する」](#)

背面のケーブル接続およびポート

次の図に、SPARC S7-2 の背面のケーブルコネクタとポートの位置、およびそれらに接続する主なケーブルとデバイスを示します。



ケーブルポートまたは拡張スロット	説明
電源装置 0 の入力電源	サーバーには、各電源装置に 1 つずつ、計 2 つの電源装置コネクタがあります。
電源装置 1 の入力電源	サーバーにデータケーブルを接続するまでは、電源ケーブルを設置済み電源装置に接続しないでください。AC 電源ケーブルを電源に接続すると、サーバーがスタンバイ電源モードになり、Oracle ILOM サービスプロセッサが初期化されます。AC 電源ケーブルが接続され、サーバーがまだ端末、PC、またはワークステーションに接続されていない場合、重要なシステムメッセージが失われる可能性があります。 注記 - 設置済み電源装置の中に AC 電源に接続されていないものがあると冗長性が失われる可能性があるため、Oracle ILOM は障害を示すシグナルを送信します。
Ethernet ポート (0 - 3)	4 つの 10G ビット Ethernet ポートにより、システムをネットワークに接続できます。10 GbE のネットワーク速度を実現するには、10GBASE-T ネットワークをサポートするカテゴリ 6A (またはそれ以上) のケーブルとネットワークデバイスを使用します。
ネットワーク管理ポート (NET MGT)	サービスプロセッサの NET MGT ポートは、Oracle ILOM サービスプロセッサへのオプションの接続です。NET MGT ポートは、デフォルトでは、動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用するように構成されています。サービスプロセッサの NET MGT ポートでは、10/100/1000BASE-T 接続用に RJ-45 ケーブルを使用します。
シリアル管理ポート (SER MGT)	サービスプロセッサの SER MGT ポートは、RJ-45 ケーブルを使用しており、Oracle ILOM サービスプロセッサへのデフォルトの接続です。このポートはサーバーへのローカル接続を行い、Oracle ILOM コマンド行インタフェース (CLI) コマンドのみを認識します。端末または端末エミュレータは通常、このポートに接続します。この接続にクロスケーブルまたはアダプタを使用するには、 49 ページの「SER MGT ポートピン配列」 を参照してください。

関連情報

- [49 ページの「SER MGT ポートピン配列」](#)
- [51 ページの「サーバーケーブルを接続する」](#)

SER MGT ポートピン配列

SER MGT RJ-45 ポートは背面パネルにあり、SP への TIA/EIA-232 シリアル Oracle/ Cisco 標準接続を提供します。このポートは、Oracle ILOM システムコントローラへのデフォルトの接続です。DTE 間の通信では、送受信の信号がクロスされる、ヌルモデム構成用に設定された RJ-45 ケーブルを使用します。標準の RJ-45 ケーブルとともにクロスアダプタを使用すると、必要なヌルモデム構成を実現できます。13 ページの「[背面パネルのコンポーネント \(設置\)](#)」を参照してください。



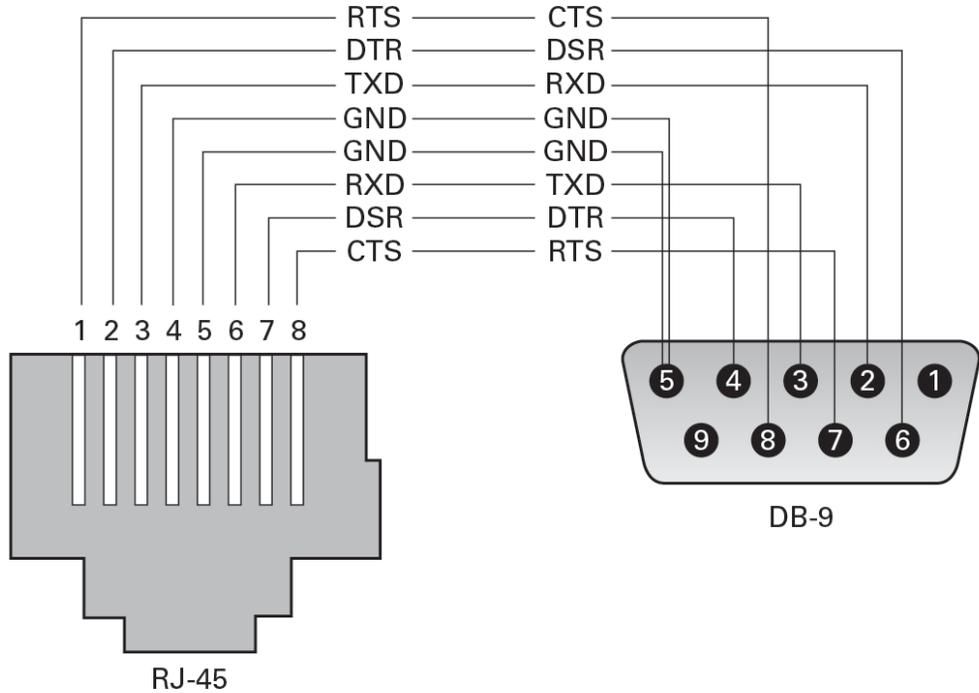
RJ-45 クロスのピン配列

適切なクロスケーブルまたはアダプタを判別するには、この表を使用します。この表では、RJ-45 列はシステムのコネクタを表し、DB-9 列と DB-25 列は端末側のコネクタを指しています。

信号	サーバー側		端末側		信号
	コンソールポート (DTE) RJ-45	アダプタ DB-9 ピン	アダプタ DB-25 ピン		
RTS	1	8	5	CTS	
DTR	2	6	6	DSR	
TxD	3	2	3	RxD	
Ground	4	5	7	Ground	
Ground	5	5	7	Ground	
RxD	6	3	2	TxD	
DSR	7	4	20	DTR	
CTS	8	7	4	RTS	

この例は、RJ-45 から DB-9 への変換の図を示しています。

Pre-GA



関連情報

- 47 ページの「背面のケーブル接続およびポート」
- 51 ページの「サーバーケーブルを接続する」

▼ サーバーケーブルを接続する

1. すべての安全要件に従い、取り付けの準備をします。
19 ページの「設置の準備」を参照してください。
2. 必要なネットワーク情報を収集します。
 - ネットマスク
 - SP の IP アドレス
 - ゲートウェイ IP アドレス

3. 端末または端末エミュレータ (PC またはワークステーション) をサーバーの **SER MGT** ポートに接続します。

ヌルモデム構成が必要で、DTE 間の通信で送受信の信号が逆になる (クロスされる) ことを意味します。標準の RJ-45 ケーブルとともに RJ-45 クロスアダプタを使用すると、ヌルモデム構成を実現できます。49 ページの「SER MGT ポートピン配列」を参照してください。

4. 端末または端末エミュレータはこれらの設定で構成します。

- 9600 ボー
- 8 ビット
- パリティなし
- ストップビット 1
- ハンドシェークなし

5. (オプション) サーバーの **NET MGT** ポートと、**SP** およびホストにあとで接続されるネットワークとを、**Ethernet** ケーブルで接続します。

SER MGT ポートを通してはじめてシステムを構成します。初期構成のあと、この Ethernet インタフェースを介して SP とホストの間の通信を設定できます。

6. サーバーの **NET** ポートの 1 つと、サーバーが通信するネットワークとを、**Ethernet** ケーブルで接続します。

7. 電源コードを電源装置および別個の電源に接続します。

注記 - 電源コードを差し込む前に、SP にシリアル接続します。このシリアル接続を行うと、電源コードの接続時にシステムメッセージを確認できます。

電源コードが接続されると、SP が初期化され、電源装置 LED が点灯します。数分後、SP ログインプロンプトが端末デバイスに表示されます。この時点では、ホストは初期化されておらず、電源も入っていません。

8. サーバーにはじめて電源を入れて取り付けを続けます。

53 ページの「はじめてサーバーに電源を投入する」を参照してください。

関連情報

- 56 ページの「プリインストールされた Oracle Solaris OS を構成する」
- 57 ページの「新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM CLI)」
- 59 ページの「新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM Web インタフェース)」

はじめてサーバーに電源投入する

次のセクションでは、はじめてサーバーに電源を投入し、OS を構成する手順について説明します。

手順	説明	リンク
1.	サーバーの電源を投入し、Oracle ILOM システムコンソールを起動します。	53 ページの「はじめてサーバーに電源を投入する」または56 ページの「プリインストールされた Oracle Solaris OS を構成する」
2.	プリインストールされている OS を構成するか、または新規 OS をインストールします。	56 ページの「プリインストールされた Oracle Solaris OS を構成する」または59 ページの「新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM Web インタフェース)」
3.(オプション)	静的 IP アドレスを使用するように NET MGT ポートを構成します。	63 ページの「静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる」

関連情報

- [19 ページの「設置の準備」](#)
- [23 ページの「サーバーの設置」](#)
- [47 ページの「サーバーの配線」](#)

▼ はじめてサーバーに電源を投入する

1. 端末デバイスで、パスワード `changeme` を使用して、`root` として `SP` にログインします。

```
login: root
Password: changeme
:~:
->
```

しばらくすると、Oracle ILOM プロンプト (`->`) が表示されます。

注記 - Oracle ILOM にはじめてログインしアクセスするときのために、デフォルトの管理者アカウント (root) とデフォルトのパスワード (changeme) がサーバーに用意されています。セキュアな環境を構築するため、Oracle ILOM への初回ログイン後、すぐにデフォルトの管理者アカウントのデフォルトのパスワードを変更する必要があります。このデフォルトの管理者アカウントがすでに変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを取得してください。

パスワードの変更、アカウントの追加、アカウント権限の設定などの管理タスクの詳細については、Oracle ILOM のドキュメントを参照してください。

注記 - デフォルトでは、SP は DHCP を使用して IP アドレスを取得するように構成されています。静的 IP アドレスを SP に割り当てる予定の場合は、[63 ページの「静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる」](#) で詳細な手順を参照してください。

2. 次のいずれかの方法でサーバーに電源を投入します。

- 電源ボタンを押します。
- Oracle ILOM プロンプトで、次のように入力します。

```
-> start /System
Are you sure you want to start /System (y/n)? y
```

サーバーの初期化は、完了するまでに数分かかることがあります。

注記 - Oracle ILOM 3.1 以降では、/SYS の名前空間は /System に置き換えられました。従来の名前はいつでもコマンドで使用できますが、出力で従来の名前を表示するには、-> **set /SP/cli legacy_targets=enabled** で有効化する必要があります。詳細は、Oracle ILOM のドキュメントを参照してください。

3. (オプション) ホスト出力をシリアル端末デバイスに表示するようにリダイレクトします。

```
-> start /HOST/console
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
Serial console started.
. . .
```

4. (オプション) サーバーの初期化中にほかの Oracle ILOM コマンドを実行できます。

- a. Oracle ILOM プロンプトを表示するには、#. (シャープ + ピリオド) キーを押します。

- b. 使用可能な Oracle ILOM コマンドに関する情報を表示するには、**help** と入力します
特定のコマンドに関する情報を表示するには、**help** とコマンド名を入力します
- c. サーバーの初期化からホスト出力の表示に戻るには、次を入力します。

-> start /HOST/console

- 5. OS をインストールして設置を続けます。
[56 ページの「プリインストールされた Oracle Solaris OS を構成する」](#)を参照してください。

関連情報

- [51 ページの「サーバーケーブルを接続する」](#)
- [55 ページの「Oracle ILOM システムコンソール」](#)
- [56 ページの「プリインストールされた Oracle Solaris OS を構成する」](#)
- [57 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM CLI\)」](#)
- [59 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM Web インタフェース\)」](#)

Oracle ILOM システムコンソール

システムの電源を入れると、Oracle ILOM システムコンソールの制御下でブート処理が開始されます。システムコンソールには、システムの起動中に実行されるファームウェアベースのテストで生成されたステータスメッセージおよびエラーメッセージが表示されます。

注記 - これらのステータスメッセージとエラーメッセージを確認するには、サーバーの電源を入れる前に、SER MGT に端末または端末エミュレータを接続します。

システムコンソールによる低レベルのシステム診断が完了すると、SP が初期化され、より高いレベルの診断が実行されます。SER MGT ポートに接続されているデバイスを使用して SP にアクセスすると、Oracle ILOM 診断の出力が表示されます。

デフォルトでは、SP は DHCP を使用してネットワーク構成設定を取得し、SSH を使用した接続を許可するように、NET MGT ポートを自動的に構成します。

システムコンソールの構成と端末の接続の詳細については、サーバーの管理ガイドを参照してください。

関連情報

- Oracle ILOM のドキュメント
- 56 ページの「プリインストールされた Oracle Solaris OS を構成する」
- 57 ページの「新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM CLI)」
- 59 ページの「新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM Web インタフェース)」
- 63 ページの「静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる」

OS のインストール

これらのトピックを使用して、プリインストールされた OS を構成するか、代替 OS を使用します。別の方法を使用して Oracle Solaris をインストールするには、https://docs.oracle.com/cd/E53394_01/html/E54756/index.html の『Oracle Solaris 11.3 システムのインストール』を参照してください。

- 56 ページの「プリインストールされた Oracle Solaris OS を構成する」
- 57 ページの「新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM CLI)」
- 59 ページの「新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM Web インタフェース)」

▼ プリインストールされた Oracle Solaris OS を構成する

1. プロンプトが表示されたら、ホストで Oracle Solaris OS を構成するための画面上の手順に従います。

Oracle Solaris OS の構成時に、次の構成パラメータの入力を求めるプロンプトが表示されます。特定の値に回答する方法が不明である場合は、デフォルトを受け入れて、あとで Oracle Solaris OS が実行されているときに変更できます。これらの設定の詳細については、Oracle Solaris のドキュメントを参照してください。

パラメータ	説明
Language	表示された言語の一覧から番号を選択します。
Locale	表示されたロケールの一覧から番号を選択します。
Terminal Type	使用している端末デバイスに対応する端末のタイプを選択します。
Network?	「Yes」を選択します。
Multiple Network Interfaces	構成する予定のネットワークインタフェースを選択します。不明な場合は、一覧の先頭を選択します。

パラメータ	説明
DHCP?	使用しているネットワーク環境に応じて、「Yes」または「No」を選択します。
Host Name	サーバーのホスト名を入力します。
IP Address	この Ethernet インタフェースの IP アドレスを入力します。
Subnet?	使用しているネットワーク環境に応じて、「Yes」または「No」を選択します。
Subnet Netmask	Subnet? の答えが「Yes」だった場合は、使用しているネットワーク環境のサブネットのネットマスクを入力します。
IPv6?	IPv6 を使用するかどうかを指定します。不明である場合は、「No」を選択して IPv4 用の Ethernet インタフェースを構成します。
Security Policy	標準の UNIX セキュリティー (No) または Kerberos セキュリティー (Yes) のいずれかを選択します。不明である場合は、「No」を選択します。
Confirm	画面上の情報を確認し、必要に応じて変更します。それ以外の場合は、続行します。
Name Service	使用しているネットワーク環境に応じて、ネームサービスを選択します。 「None」以外のネームサービスを選択すると、追加のネームサービスの構成情報の入力を求めるプロンプトが表示されます。
NFSv4 Domain Name	使用している環境に応じて、ドメイン名構成のタイプを選択します。不明である場合は、「Use the NFSv4 domain derived by the system」を選択します。
Time Zone (Continent)	該当する大陸を選択します。
Time Zone (Country or Region)	該当する国または地域を選択します。
Time Zone	タイムゾーンを選択します。
Date and Time	デフォルトの日付と時間を受け入れるか、値を変更します。
root Password	root パスワードを 2 回入力します。このパスワードは、このサーバーの Oracle Solaris OS のスーパーユーザーアカウント用です。このパスワードは、SP のパスワードではありません。

2. サーバーにログインします。

これで、Oracle Solaris OS コマンドをプロンプトで入力できるようになりました。詳細は、次で Oracle Solaris 11 OS のマニュアルページおよびドキュメントを参照してください。

<http://www.oracle.com/goto/solaris11/docs>

関連情報

- [53 ページの「はじめてサーバーに電源を投入する」](#)

▼ 新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM CLI)

プリインストールされている OS を使用する予定がない場合は、この手順を使用して、サーバーがプリインストールされている OS からブートされないようにします。

1. インストール方法に応じて、適切なブートメディアを準備します。

OS をインストールする方法は数多くあります。たとえば、USB メディアやネットワーク上の別のサーバーから OS をブートし、インストールできます。

方法の詳細については、Oracle Solaris ドキュメントの次のセクションを参照してください。

- 『Oracle Solaris 11 システムのインストール』、「インストールオプションの比較」

<http://www.oracle.com/goto/Solaris11/docs>

- 『Oracle Solaris 10 インストールガイド (インストールとアップグレードの計画)』、「Oracle Solaris のインストール方法の選択」

<http://www.oracle.com/goto/Solaris10/docs>

2. Oracle ILOM から、OpenBoot auto-boot? パラメータを false に設定します。

```
-> set /HOST/bootmode script="setenv auto-boot? false"
```

この設定により、プリインストールされている OS からサーバーがブートされなくなります。ホストの電源がリセットされていない場合に、bootmode を使用すると、変更は 1 回のブートにのみ適用され、10 分で期限切れになります。

3. OS のインストールを開始する準備ができたなら、ホストをリセットします。

```
-> reset /System
Are you sure you want to reset /System (y/n)? y
Performing reset on /System
```

注記 - Oracle ILOM 3.1 では、/SYS の名前空間が /System に置き換えられました。従来の名前はいつでもコマンドで使用できますが、出力で従来の名前を表示するには、`-> set /SP/cli legacy_targets=enabled` で有効化する必要があります。詳細は、Oracle ILOM 3.1 のドキュメントを参照してください。

4. 通信をサーバーホストに切り替えます。

```
-> start /HOST/console
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
Serial console started. To stop, type #.
```

サーバーで POST が完了するまでに数分かかることがあります。その後、OpenBoot プロンプト (ok) が表示されます。

5. インストール方法に適したブートメディアからブートします。

詳細については、目的のリリースおよびインストール方法に対応した Oracle Solaris インストールガイドを参照してください。

『Oracle Solaris 11 システムのインストール』、「インストールオプションの比較」

<http://www.oracle.com/goto/solaris11/docs>

OpenBoot プロンプトで入力できる有効なブートコマンドのリストについては、次を入力してください。

```
{0} ok help boot
boot <specifier> ( -- ) boot kernel ( default ) or other file
Examples:
boot - boot kernel from default device.
      Factory default is to boot
      from DISK if present, otherwise from NET.

boot net - boot kernel from network
boot cdrom - boot kernel from CD-ROM
boot disk1:h - boot from disk1 partition h
boot tape - boot default file from tape
boot disk myunix -as - boot myunix from disk with flags "-as"
dload <filename> ( addr -- ) debug load of file over network at address
Examples:
4000 dload /export/root/foo/test
?go - if executable program, execute it
     or if Forth program, compile it
```

関連情報

- [56 ページの「プリインストールされた Oracle Solaris OS を構成する」](#)
- [57 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM CLI\)」](#)
- [59 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM Web インタフェース\)」](#)
- [63 ページの「静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる」](#)

▼ 新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM Web インタフェース)

プリインストールされている OS を使用する予定がない場合は、この手順を使用して、サーバーがプリインストールされている OS からブートされないようにします。

1. インストール方法に応じて、適切なブートメディアを準備します。
OS をインストールする方法は数多くあります。たとえば、USB メディアやネットワーク上の別のサーバーから OS をブートし、インストールできます。
方法の詳細は、次の場所にある『Oracle Solaris 11 システムのインストール』について参照して、インストールオプションを比較してください。
<http://www.oracle.com/goto/solaris11/docs>
2. まだ実行していない場合は、次のタスクを実行して、サーバー上の Oracle ILOM Web インタフェースにアクセスします。

- a. システムと同じネットワーク上のブラウザで、IP アドレスを入力します。
- b. ユーザー名とパスワードを入力して、Oracle ILOM にログインします。
3. Oracle ILOM Web インタフェースの左側のナビゲーションペインで、「Host Management」>「Host Boot Mode」をクリックします。
「Host Boot Mode」ページが表示されます。
4. 「Host Boot Mode Settings」に次の変更を適用します。
 - a. 「State」には、「Reset NVRAM」を選択します。
この設定は、ワンタイム NVRAM (OpenBoot) に適用され、次のホストのリセット後にすべての OpenBoot 変数がデフォルト値にリセットされます。reset_nvram への状態の設定には 10 分の有効期限があり、NVRAM への状態の設定後、ホストが 10 分以内にリセットされない場合、設定は期限切れとなり通常に戻ります。
 - b. 「Script」には、「setenv auto-boot? false」を入力します。
この設定では、プリインストールされている OS を自動的にブートする代わりに、ok プロンプトでホストが停止するように構成されます。
 - c. 「Save」をクリックします。

注記 - 次の手順の実行時間は 10 分です。10 分後に、自動的に通常の状態に戻ります。

5. 左のナビゲーションパネルで、「Host Management」>「Power Control」をクリックします。
6. プルダウンメニューから「Reset」を選択して、「Save」をクリックします。
7. 左のナビゲーションパネルで、「Remote Control」>「Redirection」をクリックします。
8. 「Launch Remote Console」をクリックします。
ホストがリセットされるときに、メッセージがシリアルコンソールに表示されます。リセットアクティビティが完了するまで数分かかります。ok プロンプトが表示されたら、次の手順に進みます。
9. ok プロンプトで、インストール方法に適したブートメディアからブートします。
詳細については、目的のリリースおよびインストール方法に対応した Oracle Solaris インストールガイドを参照してください。

『Oracle Solaris 11 システムのインストール』、「インストールオプションの比較」

<http://www.oracle.com/goto/solaris11/docs>

OpenBoot プロンプトで入力できる有効なブートコマンドのリストについては、次を入力してください。

```
{0} ok help boot
boot <specifier> ( -- ) boot kernel ( default ) or other file
Examples:
boot
    - boot kernel from default device.
      Factory default is to boot
      from DISK if present, otherwise from NET.
boot net
    - boot kernel from network
boot cdrom
    - boot kernel from CD-ROM
boot disk1:h
    - boot from disk1 partition h
boot tape
    - boot default file from tape
boot disk myunix -as
    - boot myunix from disk with flags "-as"
dload <filename> ( addr -- ) debug load of file over network at address
Examples:
4000 dload /export/root/foo/test
?go - if executable program, execute it
     or if Forth program, compile it
```

関連情報

- [56 ページの「プリインストールされた Oracle Solaris OS を構成する」](#)
- [57 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM CLI\)」](#)
- [59 ページの「新規 OS をインストールする状態にする \(Oracle ILOM Web インタフェース\)」](#)
- [63 ページの「静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる」](#)

静的 IP アドレスの SP への割り当て

ネットワークが DHCP を使用しない場合は、サービスプロセッサのネットワーク設定を構成するまで、NET MGT ポートは動作しません。

注記 - 使用しているネットワーク上で DHCP を使用できない場合は、SER MGT ポートを使用して SP 上の Oracle SP に接続し、そのネットワーク用に NET MGT ポートを構成する必要があります。[63 ページの「静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる」](#)を参照してください。

- [62 ページの「SP にログインする \(SER MGT ポート\)」](#)
- [63 ページの「静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる」](#)

関連情報

- 55 ページの「Oracle ILOM システムコンソール」
- 62 ページの「SP にログインする (SER MGT ポート)」

▼ SP にログインする (SER MGT ポート)

SP がブートしたら、Oracle ILOM CLI にアクセスしてサーバーの構成および管理を行います。SP をはじめてブートしたときに、Oracle ILOM CLI プロンプト (->) が表示されます。デフォルトの構成では、root という Oracle ILOM CLI ユーザーアカウントが提供されています。デフォルトの root パスワードは、changeme です。Oracle ILOM CLI の password コマンドを使用してパスワードを変更します。

注記 - Oracle ILOM にはじめてログインしアクセスするときのために、デフォルトの管理者アカウント (root) とデフォルトのパスワード (changeme) がサーバーに用意されています。セキュアな環境を構築するため、Oracle ILOM への初回ログイン後、すぐにデフォルトの管理者アカウントのデフォルトのパスワードを変更する必要があります。このデフォルトの管理者アカウントがすでに変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを取得してください。

1. 今回のはじめてサーバーに電源を投入した場合は、password コマンドを使用して root パスワードを変更します。

```
hostname login: root
Password:
Last login: Mon Feb 18 16:53:14 GMT 2016 on ttyS0
Detecting screen size; please wait...done

Oracle(R) Integrated Lights Out Manager

Version 3.2.x.x rxxxxx

Copyright (c) 2016, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.
Warning: password is set to factory default.

-> set /SP/users/root password
Enter new password: *****
Enter new password again: *****

->
```

注記 - root パスワードを設定すると、それ以降のリブートでは Oracle ILOM CLI ログインプロンプトが表示されます。

2. 以降のすべての root ログインでは新しいパスワードを使用します。

関連情報

- 『サーバー管理』
- Oracle ILOM のドキュメント

▼ 静的 IP アドレスを NET MGT ポートに割り当てる

NET MGT ポートから SP に接続する予定の場合は、SP に有効な IP アドレスが存在する必要があります。

デフォルトでは、サーバーは、ネットワークの DHCP サービスから IP アドレスを取得するように構成されています。サーバーが接続されているネットワークが IP アドレス指定を行う DHCP をサポートしていない場合は、この手順を実行します。

注記 - DHCP をサポートするようにサーバーを構成するには、Oracle ILOM のドキュメントを参照してください。

1. 静的 IP アドレスを受け入れるように SP を設定します。

```
->set /SP/network pendingipdiscovery=static  
Set 'pendingipdiscovery' to 'static'
```

2. SP の IP アドレスを設定します。

- デフォルトの IPv4 DHCP プロパティを変更して静的 IPv4 アドレスのプロパティ値を設定するには、次のように入力します。

```
->set /SP/network pendingipaddress=IPv4-address  
Set 'pendingipaddress' to 'IPv4-address'
```

- デフォルトの IPv6 DHCP プロパティを変更し、静的 IPv6 アドレスのプロパティ値を設定するには、次のように入力します。

```
->set /SP/network/ipv6 pending_static_ipaddress=IPv6-IP-address  
Set 'pendingipaddress' to 'IPv6-IP-address'
```

3. IP アドレスの変更を確定します。

```
-> set /SP/network commitpending=true  
Set 'commitpending' to 'true'
```

4. SP のネットマスクを設定します。

```
-> set /SP/network pendingipnetmask=255.255.255.0  
Set 'pendingipnetmask' to '255.255.255.0'
```

この例では、**255.255.255.0** を使用してネットマスクを設定します。使用しているネットワーク環境のサブネットでは、異なるネットマスクが必要になる場合があります。使用している環境にもっとも適したネットマスク番号を使用してください。

5. パラメータが正しく設定されたことを確認します。

この例は、SP を DHCP 構成から静的構成に変換するように設定されたパラメータを示しています。

```
-> show /SP/network -display properties  
/SP/network  
Targets:  
Properties:  
  commitpending = (Cannot show property)  
  dhcp_clientid = xxx.xxx.xxx.xxx  
  dhcp_server_ip = xxx.xxx.xxx.xxx  
  ipaddress = xxx.xxx.xxx.xxx  
  ipdiscovery = dhcp  
  ipgateway = xxx.xxx.xxx.xxx  
  ipnetmask = 255.255.255.0  
  macaddress = xx:xx:xx:xx:xx:xx  
  managementport = MGMT  
  outofbandmacaddress = xx:xx:xx:xx:xx:xx  
  pendingipaddress = service-processor-IPAddr  
  pendingipdiscovery = static  
  pendingipgateway = gateway-IPAddr  
  pendingipnetmask = 255.255.255.0  
  pendingmanagementport = MGMT  
  sidebandmacaddress = xx:xx:xx:xx:xx:xx  
  state = enabled  
->
```

6. SP のネットワークパラメータに対する変更を設定します。

```
-> set /SP/network commitpending=true  
Set 'commitpending' to 'true'
```

注記 - show /SP/network コマンドをもう一度入力すると、それらのパラメータが更新されたことを確認できます。

7. Oracle Solaris OS を構成するときの静的 IP アドレスを設定します。

56 ページの「プリインストールされた Oracle Solaris OS を構成する」を参照してください。

関連情報

- 『サーバー管理』
- 56 ページの「プリインストールされた Oracle Solaris OS を構成する」
- 57 ページの「新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM CLI)」

- 59 ページの「新規 OS をインストールする状態にする (Oracle ILOM Web インタフェース)」
- Oracle ILOM のドキュメント

Pre-GA

Pre-GA

索引

あ

奥行仕様, 15
 オプションのコンポーネント、取り付け手順, 24
 温度仕様, 17
 温度超過 LED
 位置, 12

か

概念の概要, 9
 外部ケーブル、接続, 47
 環境仕様, 17
 クリアランス保守, 15
 ゲートウェイ IP アドレス, 51
 工具不要スライドレール構成部品、取り付け, 32
 構成
 Oracle Solaris, 56
 必要な情報, 51
 高度仕様, 17, 17
 固定部品、取り付け, 28

さ

サーバーの概要, 9
 サービスプロセッサ
 show コマンド, 63
 湿度仕様, 17
 シャーシ、固定部品の位置合わせ, 28
 周波数仕様, 16
 重量仕様, 15
 出荷用キットの内容, 19
 主電源/OK LED, 12
 仕様
 音響, 17

温度, 17
 確認, 15
 環境, 17
 高度, 17, 17
 湿度, 17
 周波数, 16
 振動, 17
 電圧, 16
 電気, 16
 電流, 16
 電力, 16
 物理, 15
 放熱量, 16
 仕様の確認, 15
 シリアルクロスケーブル, 49
 シリアル端末の設定, 51
 シリアル端末のパリティ, 51
 シリアル端末のハンドシェイク, 51
 シリアル端末のビット設定, 51
 シリアル端末のボーレート, 51
 振動仕様, 17
 ステータス LED、位置, 13
 ストップビット, 51
 ストレージデバイス, 11
 設置
 サーバーをラックに, 23
 タスクの概要, 10
 設置計画の仕様, 15
 騒音仕様, 17
 ソフトウェアインシリコン, 9

た

高さ仕様, 15
 注意事項、取り扱い, 20

通気

- クリアランス, 15
 - 通気に関するガイドライン, 18
- 電圧仕様, 16
- 電気仕様, 16
- 電源装置, 11
- LED, 13
 - 電源インレット, 13
- 電源装置障害 LED、位置, 13
- 電源ボタン、位置, 12
- 転倒防止脚または転倒防止バー, 27
- 電流仕様, 16
- 電力計算機能, 16
- 電力仕様, 16
- ドライブ, 11
- 取り扱い上の注意事項, 20
- 取り付け
- オプションのコンポーネント, 24

な

- ネットマスク, 51

は

配線

- 必要な接続, 47
- 背面パネルのコンポーネント, 13
- 幅仕様, 15
- ピン配列、SER MGT, 49
- 物理仕様, 15
- フロントパネルのコンポーネント, 12
- 放熱量仕様, 16
- ポート, 47
- 保守要求 LED, 12
- 保守用クリアランス, 15

ま

メモリー

- DIMM, 11
- 説明, 11

ら

ラック

- 互換性, 24
 - 固定, 27
 - 仕様, 24
 - 取り付け穴、サポート対象, 24
- ラックマウント
- 安全性に関する警告, 25
 - キット, 23
 - 転倒防止脚または転倒防止バー、伸ばす, 27
 - ラック、サポート対象, 24
 - ラックの固定, 27, 43
- 冷却ファン, 11

A

- AC OK LED、位置, 13
- admin ログイン、パスワードの設定, 62

C

- CPU の説明, 11

D

- DIMM の説明, 11
- DVD ドライブ, 11

E

- ESD に関する注意事項, 21
- Ethernet ポート, 11, 13

I

- I/O 拡張, 11
- IP アドレス

 - ゲートウェイ, 51

L

- LED

AC OK, 13
SP OK/障害, 12
主電源/OK, 12
電源装置の障害, 11
電源ボタン/OK, 12
保守要求, 12
ロケータボタン, 11

背面, 13

N

NET MGT ポート位置, 13

O

Oracle ILOM, 55

Oracle Solaris

構成パラメーター, 56

新規 OS のインストール (Oracle ILOM CLI), 57

新規 OS のインストール (Oracle ILOM Web インタフェース), 59

プリインストールされた OS の構成, 56

P

password コマンド, 62

PCIe カード, 11

PCIe カード、スロット位置, 11

S

SER MGT ポート

最初の電源投入, 51

ピン配列, 49

show コマンド, 63

SP OK/障害 LED, 12

SP

SER MGT ポートを使用したアクセス, 62

SP へのログイン

SER MGT ポートの使用, 62

U

USB ポート, 11

Pre-GA